
プリキュアオールスターズ×3大T巨人

ターザン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリキュアオールスターズ×3大T巨人

【Nコード】

N50230

【作者名】

ターザン

【あらすじ】

舞台はパラレルワールドのプリキュアの世界、あの3大巨人と共に世界を救う。

第1話 始まり

これは、仮面ライダー&ウルトラマン、スーパー戦隊と共同戦線を繰り広げたプリキュアオールスターズとはまた別世界のプリキュアの世界・・・。

なぎさ「ほのかほのか!!」

ほのか「どうしたのなぎさ?」

ひかり「何かあったんですか?」

なぎさ、ほのか、ひかりは学校の下校途中だった。

なぎさ「見てよこれ!!」

「タコカフェ新メニュー・Eタコ、本日発売!!!」

ほのか「アカネさん新しいメニューを考えたのね。」

ひかり「でも・・・そんな話聞いてませんよ?」

ひかりはたこ焼き屋・タコカフェで働いていて三人の中ではタコカフェについて一番詳しいのだ。

メップル「大丈夫メポ!!」

ミップル「ひかりは心配症ミポ。」

ポルン「Eタコ食べたいポポ!!」

ルルン「行くしかないルル。」

なぎさ「きつとひかりにも内緒なんだよ!!ねえねえ今日行って見ようよ!!」

ひかり「そう・・・ですね、行きましょう!!」

ほのか「じゃあ行ってみようか。」

・・・

夕風中学校・・・

咲「はあ、授業さっぱりだよ。」

舞「大丈夫?」

満「どう見ても大丈夫そうではないわね。」

薫「だったら放課後気分転換にどこかに行かない?」

舞「あつ、そうだ。」

舞はカバンから何やらチラシを取り出した。

「ゲームセンターKUGOZIE、本日オープン!!」

咲「ゲームセンターができたんだ!!」

舞「うん、4人で行こうと思って持ってきたんだけど・・・」

満「ん・・・ん？」

咲「どうしたの？」

薫「何だか・・・変な感じが・・・」

舞「気のせいじゃない？」

薫「なら良いんだけど・・・」

満「KUGOZI・・・」

フラツピ「2人共どうしたラピ？」

チョツピ「様子が可笑しいチョピ。」

満「あつ、えっ!？」

薫「なつ、何でもないわ。」

ムーブ「無理は禁物ムブ。」

フープ「心配ププ。」

・・・

ナッツハウス・・・

くるみ「ちょっとのぞみ!？」

のぞみ「ん?何、どうしたの?」

くるみは机を叩き出しのぞみに怒鳴る。

くるみ「どうしたの?じゃない!?!トイレ掃除してって言ったじゃない!?!」

のぞみ「あ・・・忘れてた。」

こまち「まあ、くるみさん落ち着いて。」

りん「しわが増えるよ?」

うらら「私のCDで怒りを抑えてください。」

かれん「何気に宣伝してるわね・・・。」

その時ナッツハウスのインターホンが鳴りだす。

ナッツ【夏】「ココ、出てくれ。」

ココ【コージ】「はい、宅配ご苦労様です。」

べつやら宅配便が届いたようだ。

りん「宅配?誰から?」

ココ【コージ】「差出人は・・・書いてないなあ、のぞみ達宛てみたいだ。」

のぞみ「私達に？」

のぞみは宅配の箱を開けた、すると何やら煙が放たれた。くるみ達は驚いて元の姿に戻った。

ミルク「なっ、何ミル!？」

ココ「びっくりしたココ・・・」

ナッツ「よいしょ、何か入ってるナッツ？」

箱の中には手紙と頑丈に閉じられた箱が入っていた。

こまち「何かしらこの箱？」

りん「手紙・・・読んでみるね。」

「拝啓、突然このような手紙と物を送りして誠に申し訳ございません。さて、本題に入ります。今日この後、××広場に物もちお集まりください。Eより」

かれん「Eさん？」

うすら「知らない人ですね。」

ミルクはまたくるみの姿になった。

くるみ「怪しいわね。」

りん「どうしようか?」

のぞみ「とりあえず行って確かめてみようよ。」

ココ「危なくないココ?」

ナッツ「××広場はここから少し遠いナツ。」

そこにシロップが部屋から出てきた。

シロップ【シロー】「じゃあ俺が送って行くよ。」

のぞみ「よろしく!」

.....

クローバータウンストリート・・・

ラブ、美希、祈里、せつなはファミレスで食事をしていた。

せつな「ラブ食べ過ぎだよ。」

ラブ「大丈夫大丈夫! 沢山食べて幸せ・・・」

美希「お腹こわしてお金も無くなったら幸せも何も不幸せゲットよ?」

祈里「とりあえずデザートが来たならもう終わりよ?」

ラブは少し残念な顔をした。
そこにせつなが何かに気がついた。

せつな「ねえ、これ何かな？」

ラブ「どうしたの？」

伝票の裏に何か書かれていた。

美希「今すぐ××広場に来てください、そこに新しいケーキ屋が
きました？」

祈里「何で・・・伝票の裏なんか？」

ラブ「行ってみようよ！！ていうか行かなきゃダメ！！」

タルト「ピーチはん、少し疑いましょうや。」

シフォン「キュアキュア。」

ラブ「大丈夫大丈夫！！」

祈里「・・・あれ？何だろこのアルファベット？・・・K？」

美希「ケーキのKかしら？」

.....

つぼみ、えりか、いつき、ゆりは一緒に下校していた。

ゆり「そういえば今日変なプリントをもらったの。」

ゆりはプリントをつぼみ達に見せる。

「新しいタイプのファッションショップ!! eショップ!! みんなで行こう!!」

えりか「これはファッション部の未来のために行かなくては・・・
つぼみ!!いつき!!ゆりさん!!行くよ!!」

つぼみ「ええ!?!ちよつとえりかああ!!」

いつき「待ってえりか引つ張らないで!!」

シプレ「えりか待つですう!!」

コフレ「置いていかないですう!!」

ポプリ「待ってくださ〜い!!」

ゆり「でもどうして学校にこんなチラシが
?」
××広場・・・

なぎさ「あれ?タコカフェは?」

咲「何何?チラシ通りの所だよね?」

のぞみ「誰からの手紙だろ?」

ラブ「ケーキは!?!だまされた!?!」

つぼみ「あれ？えりがありませんよ？」

・・・えっ？

なぎさ「みんな!？」

咲「何で集まってるの？」

のぞみ「こんな所でまた出会うなんて・・・」

ラブ「プリキュアの縁かな？」

つぼみ「でもどうしてまた？」

どうやら別世界のプリキュアオールスターズも面識があるようだ。

一同はこれまでの経緯を話した。

シロップ「一体どうなってるロプ？」

ミップル「全員状況が違うミポ。」

フラッピ「謎ラピ。」

シプレ「一回全員チラシを集めるですう!！」

一同はチラシを集めた、そしてある共通点を見つけ出した。

ゆり「全部にアルファベットが書いてあるわね。」

なぎさ組 e

咲組 KUGOZI

のぞみ組 I

ラブ組 K

つぼみ達 e

くるみ「一体何なの？」

その時

満「あ……」

ひかり「え……」

薫「そつ……そんなはずは……」

ゆり「まさか……」

4人はチラシのアルファベットの部分をハサミで切り取り並べ替えた。

のぞみ「どっしたの……!!」

ZIGOKU e IK e

一同は震え出した。

ほのか「じ……」

かれん「地獄へ・・・行け？」

その時のぞみ達の持つて来た箱がガタガタと揺れ出した・・・

つづく

第2話 死闘

のぞみ「なっ、何!？」

箱から何かが解き放たれた。

満「地獄の……」

薫「使者……。」

解き放たれた物は徐々に姿を変えていき、ついには黒い巨人に姿を変えた。

それは体から触手を放ち一同を取り押さえた。

「きゃああああ!？」

ココ「みっ!みんなココ!？」

シプレ「あっ、あれは一体何ですか!？」

触手は一同を絞め殺そうとする。

なぎさ「くっ……ほのか!！」

ほのか「うう……うん!！」

なぎさとほのかは触手に苦しめられながら精一杯腕を伸ばしなんとか手を握った。

「デュアル・オーロラ・ウェーブ!!」

なぎさとほのかは何とか変身し触手を振りほどき、ひかりを締め上げている触手に攻撃しひかりを助けた。

ひかり「ルミナス・シャイニングストリーム!!」

「光の使者!! キュアブラック!!」

「光の使者!! キュアホワイト!!」

「2人はプリキュア!!」

ホワイト「闇の力の下部達よ!!」

ブラック「さつさとお家に帰りなさい!!」

ルミナス「輝く命、シャイニールミナス!! 光の心と光の意志!! 全てを1つにするために!!」

3人は触手を放つ本体を攻撃する。

そして咲と舞、満と薫の触手の力が弱まった。

咲「舞、満、薫! 行くよ!!」

舞、満、薫「うん!!」

「デュアル・スピリチュアルパワー!!」

「月の光よ!!」

「天空の風よ!!」

咲と満は月の力で

舞と薫は風ので変身した。

「天空に満ちる月!! キュアブライト!!」

「大地に薫る風!! キュアウインディ!!」

「2人はプリキュア!!」

ウインディ「聖なる泉を汚す者よ!!」

ブライト「悪戯な真似はお止めなさい!!」

のぞみ「みんな・・・いける!？」

りん「まか・・・せて!!」

うらら「負け・・・ません!!」

こまち「かれん・・・大丈夫?」

かれん「大・・・丈夫。」

くるみ「いくわよ!!」

のぞみ達は精一杯力を出し変身した。

「プリキュア・メタモルフォーゼ!!!」

「スカイローズ・トランスレイト!!!」

「大いなる希望の力!!!キュアドリーム!!!」

「情熱の赤い炎!!!キュアルージュ!!!」

「はじけるレモンの香!!!キュアレモネード!!!」

「安らぎの緑の大地、キュアミント!!!」

「知性の青き泉!!!キュアアクア!!!」

「希望の力と未来の光!!!華麗に羽ばたく5つの心!!!YES!!!
プリキュア5!!!」

「青いバラは秘密の印!!!ミルキイローズ!!!」

6人は触手を振りほどき、怪人の顔面目掛けて殴りつけた。
その衝撃で怪人は触手の力をさらに弱めた。

ラブ「力が弱まった!!!みんな!!!」

美希「わかってるわ!!!」

祈里「いくわよ!!!」

せつな「うん!!!」

「チェインジ！！プリキュア・ビートアップ！！」

4人は触手の力が弱まった隙に変身した。

「ピンクのハートは愛ある印！！もぎたてフレッシュ！！キュアピ
ーチ！！」

「ブルーのハートは希望の印！！摘みたてフレッシュ！！キュアベ
リー！！」

「イエローハートは祈りの印！！とれたてフレッシュ！！キュアパ
イン！！」

「真っ赤なハートは幸せの証！！熟れたてフレッシュ！！キュアパ
ッション！！」

ピーチ「レッツ！！」

「プリキュア！！」

4人はつぼみ達を締め上げている触手を攻撃した。

つぼみ「えりか！！いつき！！ゆりさん！！」

えりか「わかった！！」

いつき「準備はできてる！！」

ゆり「いくわよ！！」

「プリキュア・オープンマイハート!!」

つぼみ達は触手の力が弱まった隙に変身した。

「大地に咲く一輪の花!!キュアブロッサム!!」

「海風に揺れる一輪の花!!キュアマリン!!」

「陽の光浴びる一輪の光!!キュアサンシャイン!!」

「月光に冴える一輪の花!!キュアムーンライト!!」

「ハートキャッチ!!プリキュア!!」

プリキュア一同は地面に着地、そして身構える。

満「何なのこいつ?」

パイン「見たことない・・・」

ローズ「戸惑っていても仕方ないわ!!」

ブラック「さつさと片付けよう!!」

ブライト「みんな、行くよ!!」

ブラックとブライトは高く飛び上がり怪人の顔面に殴りつけ、満と薫は怪人の腹部を蹴りつける。

そしてピーチ、マリンは怪人の脚部に蹴りを入れる。

怪人はたまらずよろける。

ローズ「やああ!!」

ローズはすかさず地面を殴りつけクレーターを作り、怪人から足場を無くした。

怪人は倒れ込んだ。

ブロッサム「ブロッサム・シャワー!!」

ベリー「悪いの悪いの飛んで行け!!プリキュア・エスパワーシヤワー!!」

ブロッサムとベリーは怪人に必殺技を放った。

怪人は苦しみます。

ムーンライト「プリキュア・シルバーインパクト!!」

パイン「悪いの悪いの飛んで行け!!プリキュア・ヒーリングプリアー!!」

そこにムーンライトとパインがすかさず必殺技を放つ。

怪人は立ち上がろうとするが

ドリーム「プリキュア・シューティングスター!!」

レモネード「プリキュア・プリズムチェーン!!」

レモネードがプリズムチェーンで怪人を縛り上げドリームが後頭部に攻撃をした。

アクア「プリキュア・サファイアアロー!!!」

ルージュ「プリキュア・ファイヤーストライク!!!」

怪人は上空から放たれたアクアとルージュの技をかわすが

パッション「プリキュア・ハピネスハリケーン!!!」

パッションのハピネスハリケーンはかわせず竜巻に吹き飛ばされる。

怪人は負けじと口から光線を放つが

薫、ウィンディ、ルミナス、ミント、「はああああ!!!」

4人のバリアーに防がれた、そして怪人の後ろにはホワイトとサンシャインが

ホワイト「はああ!!!」

サンシャイン「たああ!!!」

後ろから強烈な攻撃をくらった怪人は地面に叩きつけられる。

ブライト「・・・動かないね。」

マリ「倒したのかな?」

ドリーム「・・・多分。」

その時謎の音が響きわたった。

「気は済んだか？」

ピーチ「なっ、何!？」

すると倒したと思っていた怪人が糸に吊されるように浮かび上がる。

ルージュ「につ、人形？」

「地獄へ・・・行け。」

すると怪人は液化化しプリキュアを飲み込んだ。

ブロッサム「なっ、何ですか!？」

ルミナス「このままでは飲み込まれます!！」

薫「何か手は無いの!？」

ベリー「だっ、ダメ!！」

「きゃああああ!！」

プリキュアは飲み込まれてしまった。

.....

プリキュアは変身が解かれていた、そしてよくわからない所にいた。

なぎさ(何?.....)。

いつき（ここは・・・一体。）

すると奇妙な声が聞こえてきた。

ミラー・・・スパーク！！

ファイヤアアア！！

ジャン・ファイト！！

ほのか（この声・・・何？）

えりか（何だろう・・・不思議な感覚・・・）

咲（なんか・・・水の中にいるみたい・・・）

満（苦しいような・・・苦しくないような・・・）

・・・

ゴホッ！！

ひかり「ゲホ！！ゲホ！！・・・あれ？」

かれん「ゴホッ！！ゴホッ！！・・・ここは？」

気がつけばそこは海岸だった、プリキュアメンバー全員が打ち上げられていた。

なぎさ「・・・ん？」

咲「何・・・ここ？」

妖精達が心配そうに見ていた。

ポプリ「大丈夫でしゅか？」

メップル「良かったメポ。」

チヨツピ「死んでしまったかと思ったチヨピ。」

タルト「ほんまにはらはらしてもうたわ。」

かれん「ごめんなさい、心配かけて。」

ゆり「それよりここはどこかしら？」

ほのか「私達がさつきいた所とは全く違うし・・・」

その時、鼓膜が破れるかと思う程の音が響きわたった。

ひかり「なっ、なんですか!？」

のぞみ「耳が痛いいいい!？」

舞「あっ!?!見て!！」

海の方こうから巨大な怪獣が現れこちらに向かっている。

りん「でっ、でか!？」

こまち「早く変身しないと!?!」

しかし

ミツプル「ごめんミポ!?!さっきの怪人の波に飲み込まれてから」
ミューンになれなくなったミポ!?!」

なぎさ「ええ!?!」

のぞみ「なら私達が!?!」

しかし

せつな「って、あれ!?!」

えりか「ない!?!変身アイテムがない!?!」

そう、個人で変身アイテムを持っているメンバーも怪人の波でアイテムを無くしてしまったのだ。

かれん「何も・・・できない?」

怪獣は海岸に向かって火炎弾を放ち一同を襲う。

のぞみ「うわああ!?!どうしよう!?!?」

つぼみ「逃げようにもどこに逃げれば!?!?」

第3話 鏡の巨人(前書き)

朝焼けの光の中に立つ影は

第3話 鏡の巨人

海岸に落ちている瓶が激しく光りはじめた。

ラブ「なっ!?!」

ナッツ「何の光ナツ!?!」

すると光と共に何かが飛び出し怪獣を押し倒した。

シプレ「ななな何ですかあ!?!」

えりか「何あれ!?!」

それは体は銀、一部が緑色で顔にゴーグルがついていて目が赤い巨人だった。

これが侵略者インベーターから地球を守る鏡の巨人・ミラーマンだ。

ミラーマン（ミラーナイフ!?!）

ミラーナイフは腕を怪獣に向かって振り下ろし、手から白色のナイフを無数に投げつけて攻撃する、怪獣は苦しみだす。

かれん「効いてるわ!?!」

ポルン「凄いポポ!?!」

ミラーマンは怪獣の頭を掴み投げ倒し、高くジャンプした。

ミラーマン（ミラクルキック!?!）

ミラーマンのキックはとてつもない威力で、起き上がる怪獣を蹴り倒す。

そして両腕を横に伸ばし額と腰のベルトのバックルについているクリスタルに手を当てる。

ミラーマン（シルバークロス！！）

ミラーマンは素早く手を斜めに交差させX字の白色のカッターを放つ、これがミラーマン最強の必殺技・シルバークロスだ。

怪獣は切り裂かれ消滅した。

のぞみ「たっ・・・倒しちゃった。」

くるみ「なんて強さなの・・・。」

ミラーマンは光に包まれて人間の姿になり一同の前に現れた。

????「大丈夫かい？」

かれん「あの・・・あなたは？」

????「僕は鏡京太郎、今見た通りミラーマンだ。」

一同は怪獣だのミラーマンだのわけが分からなかった、ひとまず落ち着くために海岸に座る。

.....

京太郎「怪我してるなら無理せず教えてくれれば良いのに。」

ラブ「いやあ、言いにくかったというか・・・いたあ!？」

かれん「すみません、ご迷惑をおかけして。」

京太郎「気にしなくて良いよ。」

京太郎は先ほどで怪我をしたかれん、ラブ、いつきを手当てした。

いつき「ありがとうございます、京太郎さん。」

京太郎「うん・・・あのさ、君達は何でこんな大勢で打ち上げられていたの？」

一同は少し戸惑ったが言わざるおえないと今までの経緯を打ち明けた。

京太郎「プリキュアか・・・なるほどね。」

のぞみ「信じてくれるんですか!？」

京太郎「信じるもなにも目の前にミラーマンがいるし、インベードーだっているんだ、別世界からプリキュアが来たって可笑しくないさ。」

うすら「なるほど!！」

薫「何故か凄い納得できる。」

満「何故か悔しい。」

すると妖精達が

ココ「京太郎さん、あの怪獣はインベーターなのかココ？」

京太郎「わからない、見たことがなかったから・・・でもそれになり近い存在だと思う。」

京太郎が言うには、戦った時インベーターとは少し違う感じがしたそうだ。

ゆり「まずはこれからどうするかね。」

りん「ここは私達の世界とは違うみたいだし・・・」

すると京太郎が

京太郎「僕が所属してる組織に頼んでみる？」

一同はこれ以上迷惑はと思ったが行くあてもなく京太郎についていく事にした。

SGM本部・・・

京太郎「博士!!!」

????「おお、京太郎君・・・さっき通信機で話してくれた子達だね。」

彼は唯一京太郎がミラーマンである事を知っている人物、御手洗健

一だ。

御手洗「ミラーマンにインベーター、そしてプリキュアか……。」

京太郎「彼女達は行く宛てなく困っているんです。」

御手洗「ならばしばらくの間我々が場所を手配しよう、まあもつとも古い小屋しか空いてないがね。」

京太郎、プリキュア一同「(汗)……。」「

プリキュア一同はSGMが手配?した小屋にしばらく居候する事になった。

りん「小屋にしては大きいね……。うん。」

京太郎「博士の気まぐれには困るな、とりあえずここで我慢してね。」

えりか「我慢も何も十分ですよ!！」

満「とりあえずこれからどうするか話をしましょう。」

……

その時プリキュア一同は気づいていなかった、地底の奥深くに凶悪な者がいるのを……。

「……?」ミラーマン「ときならどつにかなる。」

その者は地底のマグマにエネルギーを送る、マグマはしだいに固ま
っていき恐竜のような形に変わっていった。

「……?」私がいる限り怪獣は何体でも作りだせる……ははは。」

く
じ

第4話 火山怪獣

プリキュア一同はSGMが手配？した小屋で朝まで寝ていた。

なぎさ「むにゃむにゃ……。」

咲「待つて〜和也さ〜ん……。」

のぞみ「特大メロンパン……いただきます……。」

ラブ「シフォン大好き……。」

つぼみ「綺麗な花……。」

ほのか「ん……。」

舞「なんていうか……。」

りん「うるさくて寝れないわね……。」

せつな「ラブ達の口と鼻テープで塞ぐ？」

えりか「地味に怖い事言わないでせつな……。」

何だかんだで何とか眠りについた一同、そして朝……

京太郎「おはよう。」

こまち「おはようございます。」

ラブ「良い天気だねえ〜。」

すると激しい爆発音が鳴り響いた。

祈里「きゃあ!？」

ひかり「何の音ですか!？」

すると御手洗博士が一同のもとに駆けつけた。

京太郎「博士!?!これは一体!？」

御手洗「この近くにある火山が突然噴火したみたいだ。」

京太郎は驚愕した、その火山が前回噴火したのはもう何百年も前の話だからだ。

京太郎「何で今になって!？」

御手洗「分からない、突然で悪いが調査に出てくれ。」

のぞみ「私達も連れて行ってください!」

京太郎「駄目だ、危険すぎる。」

くるみ「そうよ!?!それに今私達は変身出来ないんだから行っただけよ!?!」

美希「ここは京太郎さんにまかせましょう。」

のぞみ「・・・うん、京太郎さん気をつけてください！」

京太郎はすぐさま車で目的地に急いだ。

火山噴火地帯・・・

今火山は落ち着いているがいつ噴火しても可笑しくない状態にあった、溶岩はすでに固まっていた。

京太郎「溶岩に粘り気があって幸いだった、一体何が起こ・・・はあ、ついて来てたの？」

えりか「あつ、バレた。」

舞「ごめんなさい、でもどうしても心配で。」

えりかと舞の2人はいつの間にか車のトランクの中に隠れていた。

京太郎「まるで忍者だな・・・車の中で待機しててよ。」

京太郎は2人を車で待機させ火山を調査する。

京太郎「突然の噴火・・・自然界なら当たり前だが・・・」

京太郎は目を閉じて考えた、すると何かが聞こえた。

オオオオオ

京太郎「ん・・・何だ？」

オオオオオオ

その音はしだいに長く大きくなっていく。

京太郎「・・・ここはまずい!!」

京太郎は急いで車に乗り込んだ。

舞「どっ、どうしたんですか!？」

京太郎「話は後!!早く・・・」

すると火山が再び噴火した。

えりか「うわぁ!!」

京太郎はアクセルを限界まで踏み入れ火山から離れるが火山から何かが伸び地面を割り逃走ルートをたたれた。

京太郎「くそ!!」

京太郎は車から火山を見た、すると火口からは4足歩行で黄色のせびれに赤い角と目をした黒い怪獣が出てきた。

ギャオオオオオオ!!

京太郎「くっ!別の道から!!」

京太郎は再び車を走られ怪獣と溶岩から逃走をはかるが怪獣は角か

ら赤い光線を放ち逃走を阻む。

えりか「わわわっ!?!何なのよお!?!」

舞「まさか火山噴火はあれが原因!?!」

京太郎「くそっ!!進めない!!」

そしてついには赤い光線により車は吹き飛ばされ京太郎は車から投げ飛ばされた。

えりか「あああ!?!京太郎さん!!」

京太郎(このままでは僕も、車の中の彼女達も!!)

すると京太郎は空中で車の窓に向かって腕を横に伸ばし上から自分の前に持っていく両手を当てた。

京太郎「ミラー・・・スパーク!!」

すると京太郎の体は光と共に窓に吸い込まれミラーマンとなり姿を現し車を手で受け止めた。

えりか「おお、ミラーマン!!」

舞「ありがとう京太郎さん!!」

ミラーマンは車を安全な場所に置き怪獣に向き直る。

ミラーマン(ミラーナイフ!!)

ミラーマンは白色のナイフを打ち出す。怪獣の赤い光線に全て打ち落とされた、ならばとミラーマンは怪獣の角につかみかかるがその角は高熱を帯びておりあまりの熱さにミラーマンは手を放してしまった。

ミラーマン（素手では攻撃できない!!）

すると怪獣は頭でミラーマンを投げ飛ばし倒れた所を踏みつける。

ミラーマン（ぐああ!!）

さらに怪獣は口から炎を放ちミラーマンをさらに苦しめる。

舞「ミラーマンが!？」

えりか「あの怪獣強すぎだよ!？」

ミラーマンは力を振り絞って怪獣をひっくり返して体制を整えた。

グオオオオオオオ

ミラーマン（スライサーH!!）

ミラーマンは水平にカッターを放ち怪獣の角を切り落とす、怪獣は苦しみ出し目からレーザーを打ち出す。ミラーマンを手をクロスに構え前出しシールドを出現させレーザーを跳ね返し怪獣のせびれに直撃させた。

するとエネルギーが漏れ出す。

えりか「なっ、なんか出た!？」

舞「きつとせびれにエネルギーが溜まっていたのよ!!」

ミラーマン（ミラーナイフ!!）

ミラーマンは通常の倍の数のナイフを飛ばし怪獣に攻撃した、怪獣は倒れ消滅した。

えりか「やったあ!!逆転サヨナラ勝ち!!」

舞「これで火山の噴火は安心ね。」

ミラーマンは京太郎に戻った。

京太郎「あの怪獣・・・前と同じだ。」

.....

????「さすがはミラーマンだ・・・しかし計算通りだ。」

謎の存在は今度は海底にいた、そしてある魚に目をつけてエネルギーを送る、可愛らしい魚の姿は瞬く間におぞましい姿に変わり果てた。

????「ミラーマン・・・貴様はこいつに喰われて死ぬのだ、ははは。」

.....

一方その頃、オレンジ色の服の男がSGM本部に向かっていた。

????「色んな世界が入り混じったなあ、早く京太郎って人に会わないと……。」

その時、男の腕の通信機が鳴りだした。

????「はい、こちら岬、隊長どうぞ。」

隊長「岬、SGMとやらには着いたか？」

男の名前は岬と言うみたいだ。

岬「もう少しで到着する予定です。」

隊長「分かった、世界各地で様々な異常現象が起きている、急げ。」

岬「了解……ミラーマン、鏡京太郎か……。」

この男は一体誰なのか、そして何故京太郎・ミラーマンの事を知っているのか。

つづく

第5話 ミラーマン敗北

なぎさ「ねえメップル、やっぱり無理？」

メップル「・・・駄目メポ、コミュニケーションにはなれないメポ。」

妖精達はどうかしてなぎさ達を変身できるかどうか考えていた。

京太郎「やっぱり難しいか・・・」

いつき「僕達もパヒュームを落としてなければ・・・。」

ポプリ「いちゆき、元気だすでしゅー!!」

ミップル「落ち込んでいては何も始まらないミポ。」

のぞみ「でもいつまでも京太郎さんに頼っていてちゃダメだよな。」

京太郎「確かに他に手が必要かも・・・僕もいつ敗北するかわからないからね。」

一同は悩んでいた、すると御手洗博士が

御手洗「考えていても何も見つけ出せない時は海や山で気分転換すると良い。」

りん「あつ、博士。」

うらら「確かに気分転換は必要ですね。」

のぞみ「よし、海で気分転換するぞお!! けっぺい!!」

京太郎「海は強制か・・・まあ、良いか。」

一同は気分転換をすべく海へ行つた、絶望への道へと知らずに・・・

・・・

????「ついに完成した、行け!! ミラーマンを食つてしまえ!!」

謎の存在は海底にいた、その周りには紫色で目が緑色、体には刃のようなヒレ、岩をも噛み砕くあごには鋭い牙がついているもはや魚とは思えない怪獣が泳いでいた。

・・・

一同は海に来た、潮風に吹かれ裸足になり水をかけあつ者もいれば、砂で城を作る者もいる。

京太郎は砂で城を作っていた。

京太郎「・・・よし、完成!!」

りん「うわっ!?! クオリティ高っ!?!」

つぼみ「凄い器用ですね。」

京太郎「大した事じゃないよ・・・それにしても気分転換には良いね。」

のぞみ「おゝい！！京太郎さんも遊びましょうよ！！！！」

うすら「楽しいですよ！！！！」

咲「あはは！！！！」

ラブ「早く早く！！！！」

京太郎「分かった分かった、今・・・？」

京太郎は何かを感じとった。

こまち「どうしたんですか？」

京太郎「いや・・・」

のぞみ「どうしたの？」

その時、のぞみの後ろから何かが襲いかかった。

満「危ない！！！！」

のぞみ「きゃあああ！！！！」

のぞみは間髪何から逃げ切った、それは謎の存在が作り出した怪獣だった。

うすら「なっ、何ですかあ！？？」

えりか「海は危険!! 離れよう!!」

海で遊んでいたメンバーは海から離れた。

のぞみ「あつ、危なかったあ。」

薫「大丈夫!？」

祈里「何なのあれ!？」

京太郎「変身を・・・しまった!？」

京太郎はいつも変身に使うカメラをSGM本部に置いてきてしまった。

京太郎「誰か反射する物を持ってないか!？」

くるみ「急に言われても・・・あああ!!」

怪獣は海から顔を出し、口から大量の海水を吐き出した。

美希「きゃあ!!」

いつき「このままじゃまずい!!」

京太郎「どうすれば・・・あ。」

京太郎は怪獣が吐き出した海水の水たまりを見た。

京太郎「(反射してる!!) ミラー・・・スパーク!!」

京太郎は水たまりを利用してミラーマンに変身した。

ひかり「ミラーマンです!!」

えりか「いつけえ!!」

ミラーマンは海の中に飛び込んだ。

.....

ミラーマン（どこだ・・・どこにいる？）

海底は予想以上に暗く、物を判別するのが精一杯だった。その時怪獣がミラーマンを後ろから体当たりで攻撃する。

ミラーマン（うわぁ!!くっ、ミラー・・・）

ミラーマンはミラーナイフを放とうとしたがすぐに見失ってしまった。

ミラーマン（くっ・・・どこから来るんだ!?!）

すると今度は真っ正面から猛スピードで体当たりしてきた。

ミラーマン（ぐあぁ!?!）

ミラーマンはこれの繰り返しだった、いくら反撃を企ててもすぐに敵を見失いまた攻撃を受ける。

まずいと思ったのか一度地上に出ようとしたが

ミラーマン(なっ!?)

怪獣はミラーマンの足に噛みつき地上に出させないのだ。

ミラーマン(くっ!・・・まずい!?)

しかしこれは逆にチャンスでもあった、噛みついていてという事はミラーマンは当然動けないが怪獣自体も動けないのだ、ミラーマンはそれに気づきミラーナイフを放つ。

ミラーマン(ミラーナイフ!!!)

ミラーナイフは怪獣の顔面に直撃した、しかし怪獣は怒り狂いミラーマンの体を噛みつきはじめた。

ミラーマン「ぐあああああ!?!」

.....

かれん「・・・もう30分よ?」

ひかり「苦戦してるんでしょうか?」

ラブ「大丈夫だよ、京太郎さんだよ?ミラーマンだよ?」

えりか「そっだよ!!」

すると海に何かが浮かんでいるのが見えた。

つぼみ「怪獣でしょうか？・・・あ。」

祈里「そ・・・んな・・・」

それは体中傷だらけになった京太郎だった。

つづく

第5話 ミラーマン敗北(後書き)

次回、どうなるミラーマン!?

第6話 訪問者・アバン人（前書き）

主題歌カラオケでは歌えませんが、きつくて

第6話 訪問者・アバン人

SGM本部・・・

御手洗「京太郎君が人間と二次元人のハーフで良かった、そうじゃなかったら命を落としてたろう。」

のぞみ「良かった、無事で。」

海底の怪獣に敗北した京太郎はSGM本部に運ばれ手当てを受けていた。

御手洗「だけど当分戦いは控えなければならない。」

りん「でもあの怪獣はどうすれば・・・。」

満「せめて私達が戦えれば・・・。」

そこに京太郎の手当ての手伝いをしていたかれんが戻って来た。

かれん「みんな！！プリキュアの力を取り戻せるかもしれないわ！！」

うらら「ほっ、本当ですか!?!」

かれん「さっき京太郎さんが途切れ途切れに言っていたの、倒してきた怪獣から不思議なエネルギーが放出されたって。」

ゆり「そのエネルギーってまさか!?!」

御手洗「プリキュアの力だろう・・・だが君達はまだ変身できないという事は、エネルギーを持っていてる怪獣がまだ複数存在し、倒すごとにエネルギーを取り戻せると言った所かな。」

せつな「じゃあ怪獣を全て倒すまで変身できないって事ね。」

舞「私達はまだ戦えないから・・・どうやって怪獣を・・・」

すると扉の向こうから声が聞こえてきた。

SGM隊員「なんだ君は？」

???「SAFからここを訪問するように言われたんです。」

御手洗「SAF?聞いた事ないな、とりあえず入りたまえ。」

扉が開くとオレンジ色の服を着た男が入って来た。

御手洗「君は？」

???「SAFの岬大介です。」

御手洗「SAFか、私はそのような組織を聞いた事がないのだが。」

大介「実は、ある異常現象が起こっているんです。」

のぞみ「異常現象?」

それは違う世界同士が融合したという話であった。

御手洗「・・・有り得ない事ではないな。」

大介「聞きました、ミラーマンが・・・いや、鏡京太郎君が重傷を負ってしまつたと。」

一同は驚愕した、初対面の男が京太郎がミラーマンである事を知っていたからだ。

ラブ「京太郎さんの知り合い・・・ですか？」

大介「それに近いと言つた方が早いかな。」

一同はさっぱり分からなかつた。

大介「誰かその怪獣が出たという海に案内してくれないか？」

そこでつぼみ、ゆり、咲、舞は不信感を抱きつつその場所に案内した。

大介「ここか・・・。」

すると

ゆり「そろそろ教えてくれないかしら？何故京太郎さんの事を？」

舞「私も気になります。」

大介「・・・それは」

その時、海底の怪獣が姿を現し海水を放った。

大介「危ない!?!」

一同は間一髪それをかわした。

咲「大事な時に!」

つぼみ「逃げないと!?!」

しかし大介は怪獣の前に立つ。

つぼみ「岬さん!?!」

大介「全て教えるよ・・・見てくれ、僕の本当の姿を!」

岬は懐から奇妙な形の物を掲げた。

岬「ファイヤアアア!」

・・・

咲「なつ、何今の?」

舞「わからない・・・あああ!」

舞が空を指差した、それにつられつぼみ達も空を見る。

つぼみ「あつ、あああああ!?!」

咲「なななななあああ!?!」

ゆり「あれは!?!」

空から何かが蹴りを怪獣に落とした。

それは赤い体に大きな赤い目、これがファイヤースティックで岬大介が変身した炎の巨人・ファイヤーマンだ。

ファイヤーマン（ふあっ!!）

ファイヤーマンは海底に潜り怪獣にもう一度蹴りを入れる。すると怪獣は海底の暗闇に姿をくらました。

ファイヤーマン（ミラーマンはこれにやられたのか!?!）

ファイヤーマンは耳を凝らす。

オオオオ

ファイヤーマン（……………）

ゴポゴポッ

ファイヤーマン（……………）

オオオオオオオオ

ファイヤーマン（!?!?!?!）

ファイヤーマンは素早く手を掲げて槍を作り出す。

ファイヤーマン（ファイヤアアア・ジャック！！）

槍をある方向に投げつける、それは怪獣の脳てんを直撃、ファイヤーマンは怪獣の移動音、呼吸音を正確に聞いたのだ。ファイヤーマンは怪獣を抱え海中から出る。

つぼみ「あっ！！岬さん！？」

咲「あの怪獣を！？」

ファイヤーマンの額の黄色いランプが緑色に点滅しだす。

ファイヤーマンは地底以外の場所では3分間しか活動出来ないのだ。ファイヤーマンは怪獣を空高く投げ飛ばす、すると両手を懐の位置で合わせ手を離し大きく円を描き再び手を右側で合わせ構える、その手には強力な炎のエネルギーが溜まっていた。

ファイヤーマン（ファイヤアアア・・・フラッシュュ！！）

そのエネルギーを怪獣に投げつけ直撃させる。
怪獣は瞬く間に消滅した。

ゆり「なんて・・・強さ・・・」

ファイヤーマンは炎に包まれ岬の姿に戻った。

ひかり「今のは・・・一体？」

岬「改めて僕はミサキー、大昔に沈んだアバン大陸出身のアバン人だ。」

のぞみ「アバン人？」

岬「そう、そしてさっきの僕の姿はファイヤーマン、地球の最後の戦いで宇宙に消えたけど・・・なんとか戻ってきたんだ。」

美希「ミラーマンに、ファイヤーマン・・・」

ラブ「あの、もしかして・・・」

岬「うん、君達がプリキュアって事は知っているよ。」

のぞみ「やっぱり・・・」

・・・

その頃謎の存在は森の中にいた。

????「まさかファイヤーマンが帰ってきていたとは・・・まあ良い、すぐに蹴散らしてくれる。」

つじく

第6話 訪問者・アバン人（後書き）

ファイヤースティックで変身までしか見た事ないからファイヤープレスはどうしようと焦りました。

第7話 炎と鏡

SGM本部・・・

御手洗「なるほどファイヤーマンか。」

大介「はい、京太郎君が回復するまで僕が戦います。」

すると京太郎がヨロヨロと歩み寄る。

京太郎「すみません・・・僕が力不足なばかりに・・・」

かれん「まだあまり動かないでください！」

大介「気にしないで、僕も精一杯頑張るから。」

・・・

????「おのれファイヤーマン・・・炎なら燃えない怪獣だ。」

謎の存在は地面にエネルギーを送る、すると地面から土と岩が入り混じったデカい筋肉を持った怪力怪獣が出てきた。

・・・

御手洗「怪獣が現れたみたいだ。」

大介「僕に戦闘機を貸してください!!」

のぞみ「私達も行く!!」

大介「危険だぞ!？」

ラブ「行くって言ったら行くの!!」

ほのか「ただ待ってるなんて出来ない!!」

かれん「私も行くわ!!」

大介「・・・言っても無駄か。」

大介はSGMの戦闘機にのぞみ、ラブ、ほのか、かれんを乗せ発進した。

・・・

大介「この辺りのはずだが・・・」

のぞみ「何もいないよ?」

かれん「可笑しいわね・・・。」

ほのか「・・・あれ?」

ラブ「どうしたのほのか?」

ほのか「今岩が動いたような・・・」

すると突如下から石がマシンガンのように放たれた。

のぞみ「岬さん!！」

ファイヤーマン（危ない危ない。）

ファイヤーマンは戦闘機を安全な場所に置き、怪獣に立ち向かう。

ファイヤーマン（やあ!！」）

ファイヤーマンは拳で怪獣を殴りつけるが背中の岩で防がれる、手が相当痛いようだファイヤーマンは拳を押さえる。
すると怪獣は拳でファイヤーマンを殴りつけた。

ファイヤーマン（ぐあああああ!？」）

それはとんでもない力であり、ファイヤーマンは遠くに飛ばされてしまった。

ファイヤーマン（くそお!！」）

ファイヤーマンは体制を整える、そして怪獣の下に移動しその際に作ったファイヤー・ジャックの槍で怪獣に攻撃するが怪獣は手で槍を掴む。

ファイヤーマン（何!？」）

怪獣はもう片方の拳で槍を殴りつけへし折った、そしてファイヤーマンを殴りつけた。

ファイヤーマン（ぐああ!？」）

ファイヤーマンは倒れ込むが何とか立ち上がり構える。

のぞみ「あの構えは!?!」

かれん「あの必殺技ね!?!」

ファイヤーマン（ファイヤアアア・・・フラッシュ!?!）

ファイヤーマンはファイヤーフラッシュを放った、しかし怪獣は背中の岩でそれをも防いでした。

ファイヤーマン（そ・・・んな・・・）

ファイヤーマンは崩れ落ちる、額のランプが点滅しだす。

ラブ「ああ!?!ファイヤーマンが!?!」

ほのか「なんて怪獣なの!?!」

怪獣がジワジワとファイヤーマンとの距離をつめる。

かれん「ファイヤーマン!?!」

のぞみ「立って!?!」

その時

「ミラー・・・スパアアク!?!」

戦闘機の窓から何かが飛び出し怪獣に蹴りを入れる、突然の事だったので怪獣は蹴りを受けよろけた、それは負傷したはずのミラーマンだった。

ラブ「京太郎さん!？」

ミラーマン（大丈夫かファイヤーマン・・・くっ!!!!）

やはり完全に傷は癒えていなかった。

ファイヤーマン（ミラーマン!!どうして・・・）

ミラーマン（御手洗博士に無理を言った、放っておけないから。）

すると怪獣が吠える。

ファイヤーマン（いけるか?）

ミラーマン（じゃなかったら来ないよ。）

2人は構える、怪獣は石のマシンガンを放つ、2人は側転とばくてんでなんとかそれかわす。

ミラーマンは高く飛び上がる。

ミラーマン（ミラクルキック!!）

怪獣は背中の岩でキックを防ぐ、続いてファイヤーマンが蹴りを入れるがそれも岩で防がれてしまう。

ミラーマン（何て岩だ、全て防がれるとは。）

ファイヤーマン（ファイヤーフラッシュもダメだった・・・どつす
れば。）

怪獣は岩を投げつける、2人は何とかかわす。

ミラーマン（一か八かやってみよう。）

ファイヤーマン（良い策が？）

次のミラーマンの発言にファイヤーマンは度肝を抜かれる。

ミラーマン（ファイヤーフラッシュを俺に放ってくれ。）

ファイヤーマン（なっ、何を言って・・・）

ミラーマン（頼む、最後の賭けだ!!）

ファイヤーマン（・・・わかった。）

ファイヤーマンはミラーマンに賭けてみる事にした。

ファイヤーマン（ファイヤアアア・・・フラッシュ!!）

ミラーマン（ディフェンスミラー!!）

かれん「ええ!?!何やってるの!?!」

のぞみ「仲間割れ!?!」

ほのか（あれ？ミラーマンのバリアーが・・・赤くなってる？）

ミラーマン（もう一度だ！！）

ファイヤーマン（一体何なんだ！？）

2人はこれを繰り返す、怪獣は何だとはかりに首を傾げる。

ミラーマン（くっ・・・何て力だ・・・あと一発いけるか！？）

ファイヤーマン（これが限界の・・・最後の一発だ！ファイヤアアア・・・フラッシュュ！！）

ミラーマン（くっ・・・おおおお！！）

ミラーマンはディフェンスミラーを怪獣に向ける。

ミラーマン（うおおおお！！！！！！！！！！）

するとディフェンスミラーから膨大な炎の力が放たれる。

怪獣は岩で防ごうとするがあまりの威力で岩に亀裂が入り、ついに岩は砕け炎が怪獣を襲った。

怪獣は炎と共に消滅した。

.....

大介「まさかバリアーでファイヤーフラッシュを何発も吸収して威力を上げて放つなんて・・・。」

ほのか「だからバリアーが赤くなってたんだ。」

京太郎「うん・・・とつさの・・・発想・・・だ・・・けど・・・」

京太郎は倒れてしまった。

のぞみ「ええ！？京太郎さん死んじゃダメエ！！」

ラブ「・・・眠ってる。」

ほのか「えっ？」

かれん「癒えてない体で無理したら倒れるでしょうね。」

大介「京太郎君の飛行機だ、大きいから全員乗れるからSGM本部に帰ろう。」

一同は飛行機に乗りSGM本部に戻った。

つづく

第7話 炎と鏡（後書き）

戦法はあのゲームから取りました。

第8話 感情怪獣と若者

「????」・・・ファイヤーマンもミラーマンも戦闘不能にすれば・・・ん？」

謎の存在は町の建物の屋上にいた、そこで何かを見つけた。

少年「あゝ、暇暇、暇すぎ。」

あきらかに暇のオーラを放っている少年を見つけた。

「????」あの少年・・・使える。」

謎の存在は少年にエネルギーを送った。

少年「うわああああ!？」

.....

SGM本部・・・

なぎさ「んゝ、良く寝た・・・あれ、御手洗博士、京太郎さんは？」

いつもなら一番に起床しているはずの京太郎の姿がなかった。

満「京太郎さんが寝坊？珍しいね。」

御手洗「少し心配だ、りん君様子を見て来てくれるか？」

りん「あ、はい。」

りんは京太郎を起こすため部屋に行く、京太郎は寝転んでいた。

りん「京太郎さん？朝ですよ？」

京太郎「・・・あゝ、暇。」

りん「はい？」

京太郎「暇暇、暇でしようがない。」

りん「あの・・・どうしたんですか？」

それはいつもの京太郎ではなかった。

満「りん、どうしたの？」

りん「京太郎さん・・・様子が変なの。」

京太郎「暇だあゝ、暇だあゝ。」

満「・・・何かに取り憑かれてる。」

りん「わかるの!？」

満には京太郎から怪しいエネルギーが放たれているのがわかった。その頃、SGM本部に岬がやって来た。

薫「あつ、岬さん。」

大介「・・・暇だあ。」

こまち「え？」

・・・

御手洗「うん、2人共確かに変だ。」

のぞみ「さつきから暇しか口にしないの。」

祈里「何があつたんだろう。」

・・・

その頃謎の存在はまだ建物の屋上にいた、近くには暇していた少年がいた。

???「良い働きだ少年。」

少年「アリガトウゴザイマス。」

少年は謎の存在に操られているようだ。

すると謎の存在は少年からエネルギーを抜いた、少年は気を失う。そのエネルギーは怪獣に姿を変え町を襲う。

・・・

SGM隊員「博士!!!怪獣です!!!」

御手洗「くつ、京太郎君も岬君も戦える状態じゃない・・・我々S
GMが何とかしなければ!!!」

SGMは戦闘機を何機も出動させた。

満、祈里、りん、なぎさは博士の許可で怪獣の下に行く。

御手洗「・・・つい行かせてしまったが、大丈夫だろうか。」

・・・

戦闘機がミサイルで怪獣を攻撃する、なぎさは建物の屋上で様子
を見る事に、そこには謎の存在に操られていた少年が倒れていた。

祈里「気を失っているわ。」

満「ここは危険だから安全な所に。」

なぎさは少年を安全な場所に非難させて再び建物の屋上に行く。

りん「あの怪獣倒せるかな。」

満「ミラーマンとファイヤーマンがいないんじゃ、難しいかも・・・

」

その予想は的中、戦闘機は次々に落とされていく。

祈里「ああ!!!せめてプリキュアの力さえあれば!!!」

怪獣は一同の所に体を向け口にエネルギーをためる。

満「まずいわ!!」

なぎさ「逃げなきゃ!?!」

怪獣は口から衝撃波を放ち建物を倒壊させる。

「きゃあああああ!!!!!!!!!!」

するとどこからか飛行機が飛んできた。

????「人!?ああ、危ない!!」

飛行機に乗っていた若者はなぎさ達を飛行機に乗せその場を離れる。

.....

なぎさ「.....?」

????「気がついたかい?」

なぎさ「あれ?私達.....」

他のメンバーは眠っていた。

目の前には見知らぬ若者が火をたいて魚を焼いていた。
そこは海岸だった。

なぎさ「怪獣・・・怪獣は!?!」

????「あれをしてみな。」

「???」は指を指す、なぎさはその方向を見る、そこは火の海だった。怪獣ひ建物を壊され、口から出す炎で何もかも焼き尽くされかけていた。

なぎさ「まっ、町が!？」

「???」「ここは安全だ、しばらく休んでおけ。」

なぎさ「何言って・・・!？」

なぎさは腕に傷を受けていた、なんとか治療されていたが痛みは消えていなかった。

「???」その傷じゃ無理だ。」

なぎさ「でも、SGM本部が!？」

「???」SGM・・・!？」

「???」何か驚いた顔をしていた。

「???」(なるほど・・・)あの怪獣は人間の感情から生まれたんだ。」

なぎさ「感情?」

「???」「そう、謎の存在が人間の感情のオーラを怪獣に変えたんだ。」

なぎさはすぐにあの少年の事が頭に浮かんだ。

なぎさ「あの男の子・・・まだ町に!？」

????「あの少年か？」

少年は他のメンバーの隣で眠っていた。

なぎさ「なっ、何で？」

????「まあ、俺が運んだ。」

なぎさ「・・・あなた、一体誰？」

????「俺は・・・」

その時町の方向から地響きが響いた。

満「!？」

りん「あれ?・・・ここは？」

祈里「ああ!？町が!？」

少年「あ・・・あれ?僕何やってたんだ？」

少年は操られていた記憶がなかった。

????「ここで待ってな。」

????は飛行機で街に飛んだ。

なぎさ「ちよっ、まっ!？」

満「なぎさ、今の人は？」

祈里「それにこの子がどうして？」

りん「一体何があったの？」

なぎさ「一度に聞かないで、私も良くわからない。」

.....

町では相変わらず怪獣が暴れていた。

????「好き勝手暴れやがって。」

その時、????の腕時計が光った。

????「ジャン・ファイト!!!!!!!!!!」

つづく

第8話 感情怪獣と若者（後書き）

次回、ロボットとは思えないアクションをします。

第9話 ロボットヒーロー（前書き）

ジャン

ジャン

ジャン

ジャン

ジャンボーグ

ジャンボーグエース

第9話 ロボットヒーロー

????「ジャン・ファイト!!!」

????のそのかけ声と共に飛行機が有り得ない変形をし、巨人へと姿を変えた。

これがエメラルド星のエメラルド星人から地球を守るために授かったロボット、ジャンボーグAだ。

.....

なぎさ「え!?ええええええ!?」

満「飛行機が・・・変形した!?」

りん「ていうかどう変形したらあなるのよ!?」

祈里「一体あれは何なの!?」

少年「・・・ジャンボーグA・・・」

.....

ジャンボーグAは怪獣を取り押さえ何発も殴りつけ、投げ飛ばす、怪獣は口から炎を放つがジャンボーグAは高くジャンプし炎をかわり、空中で2回転してその勢いで怪獣を蹴りつける。

なぎさ「強いよあの巨人!!!え〜と・・・」

すると少年は

少年「ジャンボーグAだよ!!」

祈里「ジャンボーグA?」

満「知ってるの?」

りん「それにしても凄い動きするわね。」

しかし怪獣も黙ってはいない、頭の角から赤い紐状のものを放ちジャンボーグAを拘束した、そして口から炎を放った。

???「うわああああ!?!」

ジャンボーグAは膝をつく、そしてなんとか立ち上がるが怪獣の猛攻を受ける。

???「くっそおお!!」

???はその巧みな操縦で怪獣を押し返した。

りん「ここからじゃ良く見えない。」

少年「良い所教えるよ、ついてきて!!」

少年はなぎさ達を誘導する、そこは町の近くの高台だった。

祈里「町の様子が良く見える!!」

少年「頑張つて!!!ジャンボーグA!!!」

ジャンボーグAは額から必殺光線・ビームエメラルドを使い怪獣を消滅させた。

満「やった!!!」

しかし、何やら町の炎が集まり出し怪獣の姿となった。

なぎさ「ええ!?ありえない!!!」

りん「また怪獣!?!」

怪獣は高台にいるなぎさ達に火炎弾を放った。

祈里「きゃあ!!!」

そこにジャンボーグAは高台のなぎさ達をかばった。

????「ぐああああ!?!」

少年「ジャンボーグA!!!」

????「ジャンボーグAでは勝てないか、よし!!!フライト・リターン!!!」

ジャンボーグAは元の飛行機に戻りどこかへ飛んでいった。

祈里「ええ!?!どこ行つたの!?!」

なぎさ「ああ！怪獣が来る！！」

怪獣が高台にいるメンバーに攻撃しようとした時

????「待て！！まだ終わってないぞ！！」

????が飛行機から車に乗りかえて戻ってきた、????の腕時計が再び光った。

????「ジャン・ファイト・ツー・ダツシュ！！」

すると車が飛行機と同じようにありえない変形をし巨人へと姿を変えた。

これがジャンボーグ二号機のジャンボーグ9だ。

なぎさ「くっ、車がありえない変形した!？」

満「しかもさつきと違う!？」

少年「ジャンボーグ9だ!!」

ジャンボーグ9は怪獣につかみかかり投げ飛ばした後、その巨体で怪獣に膝落としをくらわす。

????「これ以上町を壊させるか!」

ジャンボーグ9は怪獣の頭を掴み、怪獣を投げ飛ばす、そして尻尾を掴みグルグルと回し高台から遠い所まで投げ飛ばした。

りん「さつきのより強いんじゃない!？」

祈里「凄い!!」

????「とどめだ!!」

ジャンボーグ9は両手を前に突き出す放つ必殺光線・ハンティングフラッシュャーで怪獣を葬った。

なぎさ「たっ……倒しちゃった……」

満「3人目の……」

りん「巨人……」

????「よし、クイックリターン!!」

????はそう叫びハンドルを引くとジャンボーグ9は車の姿に戻った。

……

????は町を見回す。

????「あゝあ、めちゃくちゃなあ。」

するとそこに少年が

少年「ナオキさん!!」

????「ん?……君達無事だったのか。」

なぎさ達は町に戻ってきた。

なぎさ「あの・・・あなたは一体？」

????「俺は立花ナオキ、さつき見ての通りロボット操縦士さ。」

満「ジャンボーグ・・・だっ たっ け？」

りん「巨人が3人も現れたなんてね。」

そこに祈里が

祈里「ナオキさん、その子は？」

ナオキ「あゝ、この子は俺の兄が所属してる組織PATに将来入りたいって言ってる普通の少年、前に話した事があってね。」

なぎさ（この子の感情が怪獣を生み出した事は・・・言わない方が
良いね。）

ナオキ「そういえば、他に仲間はいないの？君相当焦ってたけど。」

「・・・あああああ!？」

.....

その頃謎の存在はある絵を書いていた。

????「おのれ・・・ファイヤーマンに続きジャンボーグAや9ま

で現れるとは、見ている必ずプリキュアを抹殺してみせる。」

くじく

第10話 ミラーマン対ミラーマン!?

なぎさ達は倒壊した町を走り抜けてSGM本部に急いだ、そこにはミラーマンとファイヤーマンがいた。

少年「凄い!」

ナオキ「おお、見たことない巨人だ。」

ミラーマンとファイヤーマンは京太郎と岬の姿に戻った。

満「元に戻ったの?」

京太郎「うん、暇暇何言ってるだろうって途中で思ってた。」

なぎさ「あれ?本部が無事だ。」

御手洗「京太郎君と岬君が頑張ってくれたんだよ。」

ミラーマンはSGM本部から向こう側の町を守るため鏡の壁を張り、ファイヤーマンは炎が広がらないように炎を操っていたためSGM本部は無事だった、なぎさ達は今までの経路を話した。

御手洗「ミラーマン、ファイヤーマンに続いてジャンボーグAか。」

ナオキ「世界がそんな事になっていたなんて。」

すると京太郎が

京太郎「思ったんだけど、プリキュアメンバーは分割したほうが良いと思うんだ。」

薫「分割？」

京太郎「今日みたいについてSGM本部にも魔の手が届くかわからない、だからここSGM、岬のSAF、ナオキのPATに分けた方が安全だと思う。」

ゆり「確かにまとめて全滅でもしたらもとのこも無いわね。」

大介「名案だな。」

のぞみ「じゃあさっそくメンバー決めよう。」

というわけで

SGM なぎさ、ほのか、のぞみ、りん、ゆり、満、薫

SAF 咲、舞、うらら、くるみ、美希、ラブ、せつな

PAT かれん、こまち、祈里、つぼみ、えりか、いつき、ひかり

ナオキ「そうと決まれば少年を家まで送って、PATに行くか。」

大介「隊長に場所を手配できるか聞いておかないとな。」

京太郎「気をつけて。」

.....

その頃謎の存在はある絵を書いていた、巨人の絵だ。

「????」「この三体の巨人を放てばいくら3大巨人でも太刀打ちできまい。」

謎の存在は絵にエネルギーを送り実体化させた。

.....

御手洗「?、何だ地震か?」

なぎさ「わわ!」

なぎさはバランスを崩し倒れてしまった。

京太郎「やけに大きいな。」

満「地震なのかしら?」

薫「地震にしては不自然な揺れね、見てくるわ。」

薫が外に出る、そして慌てて戻ってきた。

薫「く・・・く、」

ほのか「どうしたの?」

薫「黒いミラーマンがこっちに来てるの!」

一同「え？」

一同は外に出た、それは本当だった、黒いミラーマンがSGM本部に向かつて来た。

御手洗「黒いミラーマン!？」

京太郎はSGM本部の窓に向かい合う。

京太郎「ミラー……スパアアク!!」

ミラーマンが現れ黒いミラーマンを押し倒す。

薫「何なのあの黒いミラーマンは……」

ゆり「不気味ね。」

黒いミラーマンの動きはミラーマンと全く一緒、影のミラーマンと言っても良いだろう。

ミラーマン(ミラーナイフ!!)

ミラーナイフで仕掛けるが黒いミラーマンもミラーナイフで対抗する。

御手洗「厄介な相手だな。」

りん「ミラーマンなら大丈夫!!」

のぞみ「そっだよ!!頑張ってミラーマン!!」

ミラーマンは空高くジャンプすると黒いミラーマンはスライサーHを放った、ミラーマンは何とか空中回転でかわしもう一度ミラーナイフを放つ、しかし黒いミラーマンはディフェンスミラーで攻撃を跳ね返す、跳ね返されたミラーナイフがミラーマンに直撃した。

ミラーマン（うっ!?!）

ミラーマンは落ち、黒いミラーマンの強襲にあう。

ミラーマン（ぐっ!?!）

ミラーマンは黒いミラーマンの足をつかみバランスを崩させる。

ミラーマンはまた高くジャンプし攻撃を仕掛ける。

ミラーマン（ミラクルキック!?!）

ミラクルキックは黒いミラーマンの肩に直撃、黒いミラーマンは苦しめだし黒い光と共に消えた。

ミラーマン（消えた!?!）

ミラーマンは京太郎の姿に戻る。

御手洗「大丈夫かい京太郎君？」

京太郎「はい、それにしてもあれは一体？」

りん「何で突然消えたんだろう？」

のぞみ「きつと恐れをなして逃げたんだよ。」

満「なら良いんだけど。」

.....

その夜・・・

のぞみはうなされていた、ミラーマンに襲われる夢を見たのだ。

ミラーマン(ミラーナイフ!!)

のぞみ「(きゃああああ!!)(うわあ!?)」

のぞみは大量の汗をかいていた。

のぞみ「はあ、はあ、何で・・・あんな夢。」

その出来事は数日続きのぞみは眠れなくなってしまった。

.....

京太郎「ミラーマンに襲われる!?!」

のぞみは数日寝ていないせいでいつもの元気がなかった。

のぞみ「最初は怪獣と戦っていて・・・倒したと思うと私に攻撃・・・してくるの。」

薫「夢だから大丈夫だと思うけど。」

りん「でもトラウマになってるんだよね・・・辛いな。」

満「・・・御手洗博士、もしかして・・・」

御手洗「その可能性は十分にあるな。」

京太郎「何かわかったんですか？」

御手洗「黒いミラーマン、あれがのぞみ君に取り憑いたんだろう。」

のぞみ「取り憑いた？」

りん「あの消えた時ね、気がつかなかった。」

ゆり「退治しようにも取り憑いてるんじゃないやあね・・・」

一同は取り憑いた黒いミラーマンを退治する方法を考えていた、すると薫が

薫「のぞみ、厳しいかもしれないけど・・・眠ってくれる？」

一同は驚愕した、ただでさえのぞみのトラウマになっている事を実行してと頼み出したからだ。

満「薫！？何言ってるのよ!？」

御手洗「・・・そうか、それなら・・・」

御手洗は何かに気づいたようだ。

りん「どういう事なんですか？」

御手洗「夢の中に京太郎君、即ちミラーマンを送るんだ。」

なぎさ「そんな事が出来るんですか!？」

ほのか「夢はいわゆる精神ですよね?」

御手洗「そう、京太郎君・・・反射する物があればミラーマンに変身できるんだらう?」

京太郎「あつ、はい。」

薫「のぞみの瞳に向かって変身できる?」

京太郎「人に向かってやった事はないからわからない・・・やってみよう。」

ほのか「でも簡単にできるかしら?」

なぎさ「物は試しだよほのか!」

御手洗「のぞみ君、眠るためにこの睡眠薬を飲んでくれ。」

のぞみ「はい。」

のぞみは睡眠薬を飲んでしばらくすると眠気に襲われた。

御手洗「京太郎君!」

京太郎「ミラー……スパアアク！」

実験は成功、見事ミラーマンはのぞみの精神世界に行った。

つづく

第11話 精神世界

ココ「のぞみ、大丈夫かココ？」

ココは心配そうにのぞみを見守る。

御手洗「君は優しいんだね。」

りん「いやあ、ココは優しいというか何というか。」

ムーブ「ココは優しいムプ。」

フープ「自分より仲間の心配をするとても優しい妖精ププ。」

御手洗「なら大丈夫だ。」

ミップル「何がミポ？」

メップル「どういう事メポ？」

御手洗「君たちがのぞみ君を助けようとしてるなら必ずその願いは叶う、今はのぞみ君と京太郎君を信じよう。」

.....

ミラーマン「ここがのぞみちゃんの世界・・・お菓子ばかりだな（汗）。」

しかしその風景は一変、目の前に怪獣が現れた。

ミラーマン（かつ、怪獣！？）

ミラーマンは戸惑いながらも怪獣をミラーナイフで葬った、そして後ろには人間サイズの宇宙人が見えた。

ミラーマン（あれが元凶か！！ミラー・・・）

その時、ミラーマンはある言葉を思い出した。

のぞみ「最初は怪獣と戦っていて、倒したと思ったら私に攻撃をしてくるの。」

ミラーマン（！！、今僕はのぞみちゃんの夢と同じ行動をしている・・・でも目の前には宇宙人・・・）

（夢・・・宇宙人・・・暗示？・・・黒いミラーマン・・・黒くて・・・同じ動き？）

ミラーマンは自分の影に向けてミラーナイフを放った。

（ぎゃあああああ！？）

ミラーマンの影から黒いミラーマンが出てきたのだ。

ミラーマン（お前はのぞみちゃんと俺の両方に取り憑いたんだな！）

まず黒いミラーマンはのぞみに取り憑きミラーマンに襲われる夢を見させるそしてミラーマンが精神世界に来る時にミラーマンに取り

憑き夢の中ののぞみが宇宙人に見えるように暗示をかけたのだ。

黒いミラーマン（しかし何故俺が貴様の影にいとわかったのだ！？）

ミラーマン（黒くて同じ姿、同じ動き、そこからヒントを得た！！）

黒いミラーマン（くっ、ミラーナイフ！！）

黒いミラーマンはミラーナイフを放ったがミラーマンはすぐさまデ
イフェンスミラーで跳ね返した。

そしてミラーマンはミラーナイフの構えをとる、黒いミラーマンは
デイフェンスミラーを張るがミラーマンは高く飛び上がった。

黒いミラーマン（！？）

ミラーマン（ミラーシュート！！）

正面に気をとられていた黒いミラーマンにミラーシュートが直撃し
た。

黒いミラーマン（ぎゃああああ！？）

ミラーマンは着地し、宇宙人がいた方向を向く、それはすでに宇宙
人ではなくのぞみの姿だった。

黒いミラーマン（くっ、おのれミラーマン！！）

ミラーマン（お前だけは絶対に許さん！！シルバークロス！！）

黒いミラーマン（シルバークロス！！）

白いシルバークロスと黒いシルバークロスがぶつかり合う、気づけばミラーマンは姿を消していた。

黒いミラーマン（どっ、どこだ！？）

その時

（ミラクルキック！！）

黒いミラーマン（何！？ぎゃあ！！）

ミラーマンはシルバークロスがぶつかり合う瞬間に高く飛び上がっていた。

ミラクルキックは黒いミラーマンの溝に入った。

黒いミラーマン（かはっ！？）

ミラーマン（ミラーナイフ！！）

ミラーマンはとどめのミラーナイフを放った。

黒いミラーマン（ちくしょう・・・お許してください、ギガント様・・・）

黒いミラーマンは消滅した、ミラーマンは京太郎の姿で現実世界に戻ってきた。

御手洗「京太郎君！！」

ココ「のぞみが目を覚まさないココー!!」

京太郎「え!? 黒いミラーマンは倒したのに・・・」

ミップル「あつ、良く見るミポ。」

なぎさ「ん?」

のぞみは笑顔で眠っていた。

のぞみ「特大ケーキ・・・いただきます・・・」

ゆり「良い夢を見てるみたいね。」

ココ「良かったココ〜。」

京太郎「助かって何よりだ(ギガント・・・一体何者なんだ?)」

つづく

第12話 マグマ対マグマ

S A F本部・・・

????「岬!!戻ってきたのか!?!」

大介「ご無沙汰です、海野隊長。」

彼はS A Fの隊長、海野軍八だ。

岬がファイヤーマンだと唯一知っている人物である。

事情説明・・・

軍八「なるほど・・・わかった、確かこの町の近くに空き家があったっけな。」

大介「ありがとうございます隊長!」

咲「ありがとうございます!」

舞「お世話になります。」

・・・

美希「・・・ねえ岬さん。」

大介「なっ、何も言っな!」

せつな「いや、言わざるを得ないわよ・・・」

くるみ「言ったら良いの？」

美希「SAFってセレブの組織？」

大介「まさか!？」

せつな「みんな愉快ね。」

.....

するといきなり外で騒ぎ声が聞こえた。

住民「火事だあああ!！」

大介「何だ!？」

くるみ「火事って言ってたわよね!？」

チヨツピ「行ってみるチヨピ!！」

一同は家を出た、すると膨大な炎が広がっていた。

ラブ「なななな何なのお!？」

シフォン「キュアアア!？」

すると炎は集まり巨人へと姿を変えた。

くるみ「黒いファイヤーマン!？」

うすら「どござしてですか!?!」

大介はファイヤースティックを取り出し掲げた。

大介「ファイヤアアア!?!」

大介はファイヤーマンに変身し、黒いファイヤーマンに立ち向かう。

フラツピ「頑張るラピ!?!」

ファイヤーマンは黒いファイヤーマンを殴りつけ掴み、懐を蹴り、投げ飛ばしたが黒いファイヤーマンは上手く着地しファイヤージャックを飛ばしてきた。

ファイヤーマン(うおっ!?!?)

ファイヤーマンはファイヤージャックをかわし、高く飛び上がり蹴りを入れようとするが受け止められぐるぐると振り回され投げ飛ばされた。

ファイヤーマン(うわああああ!?!?)

せつな「ファイヤーマンが危ない!?!」

ラブ「頑張ってファイヤーマン!?!」

黒いファイヤーマンはラブ達に目掛けてファイヤーフラッシュを放った。

くるみ「こつちに飛ばしてきたわ!？」

シロップ「ロプ!！」

シロップは飛行体に姿を変え全員を乗せて飛び上がり何とかかわした。

その隙にファイヤーマンはスライディングで黒いファイヤーマンを転ばせ足を掴み持ち上げて地面に何回も叩きつけ投げ飛ばした。

ファイヤーマン（ファイヤアアア・・・フラッシュユ!！」）

黒いファイヤーマンに向けて放ったファイヤーフラッシュにより爆発が起こった、黒いファイヤーマンは消えていた。

咲「倒したよ!！」

うらら「さすがファイヤーマンです!！」

ファイヤーマン（・・・意外とあっさりだったな。）

.....

くるみ「あの黒いファイヤーマン意外とあっさりだったわね。」

チョップ「それはファイヤーマンが強いからチョピ。」

シフォン「ファイヤー 強い。」

大介「でも本当にあっさりだった・・・何かが起こらなければ良いけど。」

舞「大丈夫ですよ、はい紅茶です。」

うらら「!!!!、美味しいです!!!」

咲「何これ!?!」

せつな「凄い高価な紅茶よ、きつと。」

大介「たまにS A Fがわからなくなる(汗)。」

その夜・・・

大介「・・・何か暑いな。」

大介はベッドから身を起こし辺りを見渡すとまわりは溶岩になっていた。

大介「なっ!?!なんだこれ!?!」

「きゃあ!!!!!!」

大介「あの声は美希ちゃんと舞ちゃん!?!」

大介はファイヤースティックを構える。

大介「(溶岩には要注意だな。)ファイヤアア!?!」

大介はファイヤーマンとなり飛行し舞と美希を探す、すると

ファイヤーマン（いたー!!）

ファイヤーマンは舞と美希を手にとり飛行を続ける。

舞「岬さん!!」

美希「なんでいきなりまわりが溶岩になってんのよ!？」

ファイヤーマンは足場を見つけ、着地して変身を解いた。

大介「おそらく黒いファイヤーマンが生きていたんだ。」

すると美希と舞が苦しみだす。

舞「はあはあ・・・」

美希「暑い・・・」

大介「しまった、脱水症状か!？」

果たして他のメンバーは？

三人は見つけ出す事ができるのか？

つづく

第13話 決めろ!!ファイヤーダッシュ!!

チヨッピ「暑いチヨピ・・・」

舞「はあはあ・・・」

美希「うう・・・」

大介はファイヤーマンとなりどこか暑さをしのげる場所がないか探していた。

ファイヤーマン（長くてあと2分・・・頼む!!）

するとある洞窟のようなところを見つけ出す。

ファイヤーマン（?、風?）

ファイヤーマンは変身を解き2人を洞窟に運ぶ。
そこはさっきの暑さがウソのように涼しかった。

大介「後は水か・・・」

するとチヨッピがある事に気づいた。

チヨッピ「水の音がするチヨピ。」

大介「この奥!？」

大介は2人を奥に運ぶ、そこは外に繋がっていた。

大介「砂漠？ちょうど良くオアシスになっているけど・・・」

チヨッピ「急ぐチヨッピ！！」

大介は水のあるところを探す。

そこに泉を見つけた。

そして驚く事にそこに残りのメンバーもいた。

咲「あつ！！3人共！！」

ラブ「わわわ！！美希たん！！舞ちゃん！！！！」

大介は急いで運び難を逃れた。

・・・

せつな「それにしてもここどこなのかしら？」

シロップ「さつき辺りを飛んでみたけど砂漠が広がってるだけだったロプ。」

うらら「不思議ですね。」

大介「多分黒いファイヤーマンが作りだした空間だと思う。」

フラッピ「ラビ！？」

シフォン「キュア？」

くるみ「そうか・・・あれはやっぱり生きてたんだ。」

「うらら」でもそうだとしたら何でこんな私達が助かるような場所を
「？」

（全員まとめて始末するためだ。）

「同」!?!」

なんと泉から黒いファイヤーマンが出てきた。

ラブ「ええええええええ!?!」

フラツピ「出たラピ!?!」

せつな「離れましょう!?!」

大介「ファイヤアア!?!」

大介はファイヤーマンに変身し、攻撃を仕掛ける。

ファイヤーマン（何者なんだお前!?!）

黒いファイヤーマン（ギガント様に作られし戦士だ!?!）

くるみ「ギガント?」

シロップ「きつとシロップ達をこの世界に連れてきた奴だロブ!?!」

ファイヤーマンは距離をとり構えた。

ファイヤーマン（ファイヤアアア・ジャック!!）

ファイヤーマンは槍を作りだすが黒いファイヤーマンも槍を作りだしお互いを攻撃しあう。

ファイヤーマン（ふっ！はっ!!）

黒いファイヤーマン（たあ!!はあ!!）

舞「一歩も引かない・・・状況。」

咲「舞!?!大丈夫なの!?!」

美希「心配・・・しないで。」

ラブ「美希たん!?!」

せつな「確かにこの勝負・・・一瞬の隙が命とりになるわね。」

ファイヤーマンと黒いファイヤーマンは互角に槍で攻撃しあいついにはファイヤーマンは槍を弾き飛ばされてしまった。

黒いファイヤーマン（死ね!）

ファイヤーマン（ぐああ!!）

槍がファイヤーマンの肩に突き刺さった。

ラブ「きゃああ!?!」

ラブはあまりの衝撃で目をそらした。
ファイヤーマンは槍を抜き距離をとる。

ファイヤーマン（ファイヤアアア・・・フラッシュ・・・くっ!?!）

ファイヤーマンの肩に激痛が走る、肩の傷で技に集中できないのだ。

黒いファイヤーマン（ははは、死ねファイヤーマン!?!）

黒いファイヤーマンはファイヤーフラッシュを放ちファイヤーマンに直撃した。

ファイヤーマン（うわああああ!?!）

くるみ「ファイヤーマン!?!」

シフォン「ファイヤー!?! 頑張れ!?!」

黒いファイヤーマン（目障りな奴らだ。）

黒いファイヤーマンは一同にファイヤーフラッシュを放とうとしたその時ファイヤーマンが黒いファイヤーマンを掴み投げ飛ばした。
黒いファイヤーマンはかるっじて着地する。

黒いファイヤーマン（馬鹿な!?! 何故だ!?!）

ファイヤーマン（直撃する瞬間にファイヤーガードで耐えた・・・くっ!?!）

しかし全てを耐えきったわけではなかった。

せつな「頑張つてファイヤーマン!!」

咲「負けちゃダメ!!」

ファイヤーマンは一同に向かって頷き黒いファイヤーマンに向き直る。

黒いファイヤーマン（死に損ないがあ!!死ねえええ!!）

黒いファイヤーマンはファイヤーフラッシュを5発連続で放った。

ファイヤーマン（うおおおお!!!!!!!!!!）

しかしファイヤーマンは体中にマグマエネルギーをためる。

ラブ「うお!!なんかファイヤーマンいつも以上に暑いよ!」

美希「最後の賭けに出るのね!」

黒いファイヤーマン（まさか!）

ファイヤーマン（ファイヤアアアアアアア・ダアアアアアア
ツツツシュ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!）

ファイヤーマンはマグマエネルギーをためた体ごと黒いファイヤーマンに突っ込む、5発のファイヤーフラッシュにもろともせず

黒いファイヤーマン（くっ!?!馬鹿な!?!ぎゃあああああああ

！？)

膨大なマグマエネルギーと共に黒いファイヤーマンは消滅した。

.....

黒いファイヤーマンを倒すと空間は消えて一同はSAFが手配した豪.....宿に戻った。

舞「岬さん、肩は？」

大介「今は肩より.....体力的にまずい.....あの技は.....両刃の剣だからな。」

くるみ「ていうかもう朝になってる。」

うらら「今日はゆっくり休みましょう。」

大介「そうだな、そうした方が良さな。」

一同は夜寝れなかった分たっぴりと寝た。

つづく

第14話 ジャンボーグ対ジャンボーグ

PAT本部・・・

ナオキ「お〜い、つて誰もいないや。」

するとかれんが何かを見つける、置き手紙だ。

かれん「手紙があるわ、読むわね。」

「しばらく全員本部を離れる、探さないでくれ by PAT一同」

ナオキ「何だこの家出少年少女みたいな手紙（汗）。」

つぼみ「これでは場所が手配出来ませんね。」

祈里「ナオキさん、どうしましょうか？」

ナオキ「・・・いつそのことここを使おう。」

えりか「良いの!？」

ナオキ「バレなきゃ大丈夫だ。」

いつき（最近の子供だ。）

ポプリ「機械がたくしゃんでしゅっ!」

シプレ「部屋がいっぱいですっ!」

コフレ「わ〜いですう!」

こまち「あっ、あまり機械に触ったらダメよ?」

ナッツ「落ち着くナツ!」

タルト「心配でんなあ。」

ひかり「ポルン!!ルルン!!危ない!!」

ポルン「ルルンと遊ぶポポ!!」

ルルン「鬼ごっこルル!」

ナオキ「壊したら逃げよう。」

一同「(汗)。」

.....

ナオキは一同とひとまず外に出た、するとナオキのセスナ(飛行機)の隣に黒いセスナが止まっていた。

ナオキ「こんなのあったか?」

こまち「無かったと思うけど.....」

かれん「いや、無かったわよ。」

ナオキは恐る恐る黒いセスナに近づくとそれはいきなり飛び出し変形して黒いジャンボーグAになった。

ひかり「なっ、何ですか!?!」

祈里「どうなってるの!?!」

ナオキは慌ててセスナに乗り飛び出した。

ナオキ「ジャン・ファイト!!!」

セスナはジャンボーグAに変形し黒いジャンボーグAと戦つ。

ナオキ「おらっ!!!たあ!!!」

ジャンボーグAが攻撃すると仕返しとばかりに黒いジャンボーグAが反撃をする。

ナッツ「力は互角ナツ。」

かれん「姿だけじゃなく力も同じなのね。」

つぼみ「頑張ってください!!!」

えりか「そんな真つ黒黒助なんかやっっちゃええ!!!」

シプレ、コフレ、ポプリ「やっっちゃええですう!!!」

ジャンボーグAは黒いジャンボーグAのパンチをしゃがんでかわし足を掴み黒いジャンボーグAをひっくり返した。

ナオキ「とお!!」

ジャンボーグAは飛び上がり黒いジャンボーグAの懐目掛けて膝落としをくらわせ、さらに掴み上げて空高く投げ飛ばした。

ポルン「今ならやつつけられるポポ!!」

タルト「やつてもうたれえ!!」

ジャンボーグAはハンティングフラツシャーを放った、しかし黒いジャンボーグAはセスナに変形しハンティングフラツシャーをよけて飛んで行った。

ナオキ「なんだったんだ?・・・フライトリターン!!」

・・・

いつき「黒いジャンボーグAか・・・」

ナオキ「焦ったよ、まさかジャンボーグに3体目があるなんてさ、まあ多分エメラルド星人が作ったのでは無いってのは間違いないな。」

ひかり「そういえばジャンボーグAはエメラルド星人というのが作ってたんだね。」

祈里「あとジャンボーグ9もね。」

えりか「でもそうじゃないって何でわかるの?」

ナオキ「ジャンボーグはエメラルド星人が作ったんだぞ？わざわざ黒いので戦わせるはずないだろ。」

かれん「確かに不思議ね……。」

するとこまちが羊羹とお茶を運んできた。

こまち「冷蔵庫に入ってた羊羹を持ってきたわ、みんなで食べましょう。」

つぼみ「冷蔵庫なんてあるんですか!？」

いつき「ますます謎だね、PAT本部(汗)。」

ポプリ「お菓子ですっ!!！」

一同が羊羹を食べお茶をすするなか祈里が

祈里「そういえばこの羊羹はいつまでなんですか?」

こまち「え」と箱箱……7月1日。」

ナオキ「え」と、カレンダーは……と」

10月29日……

一同「……。」

その日中、彼らの腹にハンティングフラッシュャーが走ったのは言う

までもない。

翌日

えりか「うう、昨日はひどい目にあつたわね。」

こまち「ごめんなさい、私のせいで。」

かれん「いや、こまちは謝らなくても・・・4ヶ月たつてる食べ物が入ってるのが可笑しいのよ。」

その時、何やら飛行音が聞こえる。

ナオキ「何だ？」

一同はヘリポートに出る、するとそこには昨日戦った黒いジャンボーグAのセスナが10機こちらに飛んできたのだ。

いつき「あれは昨日のセスナ!？」

ひかり「10機もあります!？」

つぼみ「そんな!?!もし変形でもしたら・・・」

その予想は的中、黒いセスナは全て黒いジャンボーグAに変形したのだ。

コフレ「うわああああ!!!真つ黒黒助の大群ですう!？」

タルト「えらいことになつたでえ!？」

ナオキはすぐさまセスナで飛び出しジャンボーグAに変形させ10
体の黒いジャンボーグAを相手に立ち向かう。

つづく

第15話 悪のジャンボーグ集団！！

ジャンボーグAは黒いジャンボーグAに蹴りをくらわせ2発目を繰り出そうとするがもう1体の黒いジャンボーグAに阻まれる。

ナオキ「うおっ！？邪魔だどけ！！」

しかし、黒いジャンボーグA集団がジャンボーグAの動きを止め殴る蹴るの猛攻を与える。

ひかり「多勢に無勢なんて卑怯ですよ！！」

かれん「力が互角でも集団で来ると苦しいわね。」

タルト「あわわわ、ピンチでんがなあ。」

ジャンボーグAは何とか集団を振り払い蹴りを入れていくが1体では厳しいようだ。

ナオキ「くそお、多いんだよ！！このやるおおおお！！！！！！！！」

気の短いナオキはついに頭にきてやけくそに攻撃をする。

こまち「冷静さを失ってるわ！！」

ナッツ「落ち着くナッツ！！」

黒いジャンボーグAはジャンボーグAと距離をとり全方向からハンティングフラッシュャーを放った。

ナオキ「あああああああああ!?!」

いつき「ナオキさん!?!」

ジャンボーグAはついに倒れてしまった。

えりか「うわあ!?!ジャンボーグAがあ!?!」

コフレ「立つですう!?!」

すると黒いジャンボーグAはヘリポートにいるメンバーの方を向いた。

つぼみ「ええ!?!まさか私達を!?!」

祈里「しかも10体同時!?!」

シプレ「いやああああですう!?!」

.....

その頃機内のナオキは

ナオキ「.....くっ、そお.....9に乗り換え.....ないと.....」

ナオキはフライトリターンをしたいが体に激痛が走りなかなか行動できない。

ナオキ「(まずい.....このままじゃ.....あいつらが.....)う・

・・・おおおおお！フライトリターン！！」

何とか力を振り絞り絞りジャンボーグAをセスナに変え飛び立つ。

・・・・・・

えりか「うわあああああ！？」

黒いジャンボーグAは手を大きく振り回し威嚇する、威嚇といえど巨大な手だ、当たればひとたまりもない、なんとか手をよけながらその場をしのぐ。

ポプリ「いつ、いちゆきいい！？」

いつき「ポプリ！！離れないで！！」

かれん「はあはあ、まずいわ！！」

・・・・・・

ナオキはジャンカーの場所にたどり着くがその場で倒れてしまった。

ナオキ「・・・くっ、寝てられるか！！」

ナオキは激痛の中ジャンカーに乗り込んだ。

ナオキ「ジャン・ファイト！！ツー・ダッシュ！！」

ジャンカーはジャンボーグ9に変形し黒いジャンボーグAに立ち向かう。

タルト「見てみい！！ジャンボーグ9やあ！！」

祈里「ってナオキさん大丈夫なの！？」

もちろんナオキの体は限界に近い、しかしナオキは力を振り絞る。

ジャンボーグ9は黒いジャンボーグAの頭を片手で掴み持ち上げて他のジャンボーグAの所に投げつける。

えりか「ジャンボーグ9でも大丈夫かな？」

こまち「きつと大丈夫よ。」

ジャンボーグ9は黒いジャンボーグAを近づけさせまいと攻撃に出る。

ナオキ「10体もどうやって・・・くっ！！！！」

ジャンボーグ9は何とかその頑丈な体で攻撃を受け止め反撃し1体の黒いジャンボーグAを怯ませハンティングフラッシュャーで破壊した。

かれん「まずは1体！！」

ひかり「でも後9体も・・・」

ナオキ「一か八かの・・・賭けだ！！」

ジャンボーグ9はわざと敵陣の中心に入り込んだ。

黒いジャンボーグAは同時にハンティングフラッシュャーを放った、

それと同時にジャンボーグ9は高くジャンプしてかわした。ハンテイングフラッシャーは黒いジャンボーグAに直撃、3体は破壊された。

祈里「相手の攻撃を利用したわ!!」

いつき「もう少しだ!!」

本当は空中攻撃を仕掛けたいがジャンボーグ9はAと違い飛行能力を持っていない。

ナオキ「くそ、まだ6体か・・・骨が折れるぜ。」

すると黒いジャンボーグAは空を飛んだ。

ナオキ「くそ!!こっちは飛行能力無いんだぞ!?!」

ジャンボーグ9はハンテイングフラッシャーを連射するが空中旋回されなかなか当たらない。

かれん「ジャンボーグ9は飛行能力を持ってないのね。」

こまち「多勢に無勢のうえにそんな事をするなんて!?!」

すると1体の黒いジャンボーグAがジャンボーグ9に体当たりをしてきた、しかしジャンボーグ9はそれを殴りつけ落とした。

ナオキ「このやるおおおお!!」

ジャンボーグ9は拳で黒いジャンボーグAの装甲を貫き爆破させた。

コフレ「凄いパンチ力ですう!!」

そしてジャンボーグ9は頭部のクロスカッターを投げつける必殺技・ブーメランカットを放ちそのブーメランにハンティングフラッシュャーの強化版・ミラクルフラッシュャーを放ちブーメランを強化させ2体の黒いジャンボーグAを切断し爆破させた。

かれん「あと3体よ!!」

しかしジャンボーグ9も限界が近づいてきたようだ、ジャンボーグ9はジャンボーグAのセスナに触れる、するとセスナの故障箇所が修理されたのだ。

ナッツ「セスナが修理されたナッツ!!」

ナオキ「クイックリターン!!」

ナオキはセスナに乗り換えジャンボーグAに変形させ空を飛んだ。

ナオキ「行くぞ!!」

ナオキはジャンボーグAの頭部のカッターを発光させ相手に突っ込む必殺技・ヘッドディングキラーを繰り出し黒いジャンボーグAを2体爆破した。

祈里「ついにあと1体!!」

両者着地し向かい合う。

ナオキ「黒いジャンボーグAよ、真の戦士なら・・・後ろに三歩歩
きハンティングフラッシュヤーの撃ち合いで勝負を決めよう。」

ナオキは西部劇でよく見る勝負で決着をつけようと黒いジャンボー
グAに語りかける、黒いジャンボーグAはそれを引き受けたかのよ
うに後ろを向く、ジャンボーグAも後ろを向く。

えりか「おっ、男と男？の真剣勝負ね。」

ポプリ「頑張るでしゅう!!」

いつき「しっ！静かに!!」

1・・・

一同に緊張が走る。

2・・・

・・・3!!

・・・

つぼみ「・・・いつ、今は・・・どっちが？」

シプレ「わかりません。」

するとジャンボーグAが膝をついてしまった。

タルト「ああああ!!もうダメやあ!!」

祈里「あつ!?待って!!」

黒いジャンボーグAは強く発光し爆破した。

ナオキ「はあはあ、緊張したあ。」

「やったあああ!!」

黒いジャンボーグAのハンティングフラッシュャーは肩をかすり、ジャンボーグAのハンティングフラッシュャーは見事黒いジャンボーグAの懐に直撃したのだ。

ナオキはセスナから降りると同時に疲労で倒れてしまった。

かれん「大変!!早く部屋に運びましょう!!」

ナッツ「急ぐナッツ!!」

ついに3大巨人は黒き巨人を倒した。

その頃・・・

???「プリキュアも力を取り戻してしまう、こうなれば計画も第2段階に進ませなければ、全ての世界はこのギガントの物だ、はははは。」

つづく

第15話 悪のジャンボーグ集団!! (後書き)

今回はプリキュア登場!!

ミラーマンsideから

のぞみ「やっと次回変身できるね。」

りん「本当、待ちくたびれたわ。」

ターザン「…………ぐす。」

満「泣いてるの!?!」

薫「一体どうしたのよ?」

ターザン「今ね、初代ウルトラマン見てて……女の子の言葉に感動しちゃってさあ、ぐす。」

ゆり「鼻水ふきなさい。」

なぎさ「どんな言葉?」

ほのか「教えて!!」

ターザン「それは次回のお話であきらかに!!」

第16話 苦悩(前書き)

途中からナレーションがのぞみになります

第16話 苦悩

黒いジャンボーグAを倒した翌日、京太郎、大介、ナオキから謎の光が放たれた。

京太郎「何だ!？」

なぎさ「光がどこかに続いている!？」

.....

大介「行ってみるか。」

舞「何だろう?」

.....

ナオキ「来てみたけど、ここがどうかしたのか?」

かれん「誰か来るわ。」

.....

一同は光に導かれていつの間にか合流していたのだ。

のぞみ「あっ!?!みんな!?!」

ラブ「この光は、一体?」

すると光は分散しプリキュアメンバーの体にうつった。

ほのか「何・・・今の？」

すると妖精が

ミッブル「ほのか！！コミュニケーションになれるミポ！！」

ほのか「本当！？」

フラッピ「本当ラピ！！」

大介「ついに取り戻したか。」

満「ありがとうございます！！」

京太郎「いやいや、みんなのおかげだよ。」

ナオキ「これで少し有利になったな。」

のぞみ「よし、みんなでどんな怪獣も倒すぞ！！けっしていい！！」

一同「おおおおお！！」

.....

そう、その時私達は怪獣を倒せば平和が訪れて自分達も元の世界に戻れると思ってた、でもあの子に出会って・・・私のその考えは一変した。

.....

SGM本部・・・

のぞみ「ギガント?」

京太郎「うん、黒いミラーマンが死ぬ直前に言ったんだ。」

ミッブル「恐らく怪獣を作ってる張本人ミポ。」

なぎさ「ありえる!!」

すると御手洗博士が

御手洗「京太郎君。」

京太郎「博士?どうしたんですか?」

御手洗「実はSGMアメリカ支部から声がかかって君に同行してもらいたいんだ。」

京太郎「・・・でももし怪獣が現れたら、大介やナオキは結構遠いし。」

のぞみ「まかせてくださいよ京太郎さん!!」

京太郎「君達だけで大丈夫かい?」

りん「まかせてよ。」

ココ「のぞみ達が言うから大丈夫ココ。」

御手洗「ほんの2、3日だ。」

京太郎「・・・わかりました、いきましょう。」

なぎさ「よし、張り切っていくぞ!」

京太郎さんと御手洗博士が本部を出たのが始まりだったの、怪獣が現れたから私達は変身して戦いに出た。

住民「ミラーマンの他にも怪獣を倒す戦士が来てくれた!」

住民「これで安心だ!」

プリキュアの事が町中に広まったそんなある日、あの出来事が起こったの。

りん「みんな!!怪獣が出たよ!!」

満「行きましょう!!」

みんな変身して怪獣の所に行ったら、ある女の子がいて私は危ないと思って女の子を避難させた。

ドリーム「ここは危ないから逃げて!!」

女の子「待って!!やめて!!」

私は女の子の声が聞こえなかった、怪獣を倒す事で頭がいっぱいだったから。

ルージユ「おらっ!」

満「はっ!!--やあ!」

薫「たあ!!--」

ムーンライト「ドリーム、女の子は!？」

ドリーム「避難させました。」

ブラック「私達が相手を引きつけるから!!--」

ホワイト「ドリームが決めて!!--」

ドリーム「わかった!!--...プリキュア!!シューティングスタ
!--!!--」

私達は怪獣を倒した、すると近くにあの女の子がいた。

ムーンライト「あら?あの子は...」

ドリーム「あつ、来ちゃったんだ、怪我ない?」

私が女の子を心配して手を近づけるとその子は私の手を払いのけた。

女の子「触らないで!!--」

ドリーム「え……」

私は最初何が何だかわからなかった、女の子は走り去ってしまった。
ルージユ「何？助けてもらっておいであの態度は。」

ホワイト「変わった子ね。」

ドリーム「……私心配だからみんな先に戻ってて。」

満「え、わかったわ。」

私は心配で女の子を追いかけた、途中から雨がポツポツと降ってきて、次第に大きくなって私達の体を強く打ちつけた。

ドリーム「ちょっと待って!!」

女の子「はあはあ、あつ!!」

女の子は足を滑らせて転んでしまったの。

ドリーム「大丈夫!？」

その時、女の子は私にこう言った。

女の子「正義の味方のつもりなの!？」

ドリーム「え……何が?どうしたの?」

女の子「あなた達やミラーマンはいつもそうよ!!どんな時でも怪

獣だからという理由ですぐに殺してしまう!!・・・中には心の優しい怪獣だっているのに・・・」

ドリーム「心の・・・優しい怪獣?」

女の子「私はいつも1人だった・・・あの子が・・・唯一の友達だった・・・さつきだって私を・・・いじめっ子から守ってくれただけなのに・・・」

その子は雨に打たれながら涙を流していた、私は頭の中がぐちゃぐちゃだった、今まで心の優しい怪獣なんて考えた事なかったから・・・

女の子「それなのにあなた達は私の声も聞かずにあの子を殺した!」

ドリーム「そんな・・・違う!!違うよ!!私達は・・・」

女の子「何が違うのよ!? 所詮あなた達は自分の名誉のために戦ってるのよ・・・」

ドリーム「そんな・・・」

女の子「この人でなし!!」

ドリーム「!?!」

女の子は私にそう言い放って走り去っていったの・・・私は強い雨に打たれながらうつむいてしまった。

.....

りん「もうのぞみ遅いなあ、雨強いじゃない。」

りんちゃんは私の事を捜してくれてた。

りん「あつ、いた……のぞみ！？どうしたの！？何で泣いてるの！？」

雨に濡れてびっしょりだった私は泣きながらりんちゃんの胸に飛び込んだ。

りん「ちょっと……どうしたのよ？」

のぞみ「うっ……うっ……」

.....

SGM本部……

なぎさ「そんな事が……」

のぞみ「……わからなくなっちゃった。」

満「？」

のぞみ「何が正しくて……何が間違ってるのか……もうわからなくなっちゃった……。」

ゆり「今日はもう休みなさい、一旦落ち着きを取り戻して。」

私は自分の寢床に行った、横になってたらそしたらまた涙が出てきて止まらなくなって・・・気づいたら眠ってた。
次の日、昨日の雨のせいで風邪をひいちゃった・・・私は1日眠ってるように言われてそうしてた。

のぞみ「コホッコホッ・・・（あの女の子、どうしてるんだろっ？）」。

その時、町で騒ぎ声が聞こえた。

のぞみ「もしかして怪獣！？うう・・・」

熱でふらふらして起き上がれなかった、みんなにまかせたほうが良いかな？って思った。

（正義の味方のつもりなの！？）

私は昨日の女の子の言葉を思い出していた。

のぞみ「どうしよう・・・」

その時、やはり怪獣が街に出た事がはっきりわかった、雄叫びみたいなのが聞こえたの、でもどこかで聞いた事があった。

のぞみ（もしかして昨日の女の子！？）

もしそうだとしたら大変だ、ふらふらの体を無理やり立ち上がらせて私は街に出た。

.....

「デュアル・オーロラウェーブ!!」

「月の光よ!!」

「天空の風よ!!」

「プリキュア・メタモルフォーゼ!!」

「プリキュア・オープンマイハート!!」

ブラック「何なのあの怪獣!？」

ホワイト「凄い雄叫び!!」

満「なんだか・・・」

薫「悲しんでる?」

ムーンライト「考えてる暇はないわ!!くるわよ!!」

ルージュ「うわっ!？」

ホワイト「はぁ!!」

ムーンライト「たぁ!!」

私が来た時にはプリキュアは怪獣を押し倒していたけど苦戦してい

た。

のぞみ「もし昨日の女の子だとしたら何で怪獣に？」

その時だった、怪獣が私に気づいて襲ってきた。

満「のっ、のぞみ!？」

薫「何でここにいるのよ!？」

のぞみ「きゃあ!？」

ムーンライトが攻撃を受け止めてくれた。

ムーンライト「逃げなさい!！」

のぞみ「でもその怪獣は!！」

すると怪獣から女の子の声があったの、他の人にも聞こえてた。

怪獣「オ・・・ネガ・・・イ・・・コロ・・・シテ・・・」

のぞみ「!？」

怪獣「モウ・・・モトニ・・・モド・・・レナ・・・イ」

ムーンライト「まさか昨日のぞみが言ってた女の子!？」

ホワイト「そんな・・・」

のぞみ「できないよそんな事!!それが正しいのかわからないのに!!」

怪獣「オ・・・ネガ・・・イ」

私は胸が締め付けられそうだった。

ムーンライト「のぞみ!!逃げなさい!!あなたには出来ないわ!!」

薫「早く!!」

のぞみ「くっ・・・」

そして私は決心して変身して怪獣を押し倒した。

ブラック「ドリーム・・・」

ドリーム「うう・・・くっ・・・」

私は泣きながら戦った、本当はこんな事したくなかったから。

ドリーム「きゃあ!？」

私は怪獣に叩き飛ばされた、そしていつの間にか手にクリスタルフルーレを握っていた。

怪獣は雄叫びを上げて私に襲いかかってきた。

ブラック、ホワイト、満、薫、ルージュ、ムーンライト「ドリーム!!」

第17話 豪・・・宿の秘密（前書き）

前回は悲しい話だったので今回は明るい話です。

第17話 豪・・・宿の秘密

大介達はS A Fが手配した豪・・・宿で怪獣が出ないからのんびりしていた。

大介「あれえ？コーヒー豆切らしてる。」

くるみ「紅茶の葉もないわ。」

ラブ「お菓子ない!？」

シフォン「キュア!？うえええん!!」

せつな「まずいわ、今すぐ買ってくるわ!！」

するとせつなは何やら赤いボタンを見つけます。

せつな「何かしら?」

ポチ

するとせつなの足場が穴となり落ちてしまった。

せつな「きゃああああ!!」

ラブ「せつな!？」

偶然見ていたラブはみんなに報告します。

うらら「せつなさんが!？」

ラブ「そうなの!!床が開いて穴にスポーンって・・・」

美希「妙ね、この豪・・・宿は(汗)。」

舞「なにか仕掛けが？」

咲「どういう事何だろう?」

ポチ

咲「?」

咲は壁に付いていたボタンをよっかかるはずみで押ししてしまった。
そして床が開いた。

「ぎゃあああああああああああ!？」

.....

ラブ「うくん・・・あっ、せつな!!!」

せつながいた。

せつな「ラブ!!!」

ラブ「せつな、どこどこ?」

せつな「わからないわ・・・真っ暗ね。」

「????」お〜い。」

ラブ「ひっ!?!何!?!」

「????」ラブ!?!せつな!?!降りてよ!?!」

ラブとせつなは気づかず一同も踏みつけていた。

大介「痛た、何だここ?」

舞「明かりがほしいわね・・・」

くるみ「段々暗さになれてきたわ・・・ん?ボタン?」

くるみはボタンを押すと明かりがついた、そこはとんでもない風景だった。

大介「・・・夢だな。」

くるみ「夢ね。」

舞「夢に決まってるわ。」

他の者共「ケーキの木だあああああああ

!!

!!!!!!!!!!」

辺りはケーキが実っている?木が広がっていた。

大介「夢だろおおおおおどうなってんだよおおおおおSAFU

うううううう！?」

シフォン「キュアアアア!」

ラブ「ショートケーキにチーズケーキ! うわあ! シュークリームもある!」

うらら「カレーはありますか!」

くるみ「そんなのあるわけ・・・」

カレーのなる木

くるみ「あつたあああああああああ!」

大介「何なんだよおおおおお!? SAFうううううううううう!」

舞「落ち着いて岬さああああん!」

.....

とりあえず一同はどこからかテーブルを出しティータイムに。

ラブ「おいしい」

シフォン「キュア」

咲「ていうかSAFって本当に謎だね。」

大介「反論出来ません（涙）。」

せつな「でも地下に何でこんな不思議な木が？」

くるみ「確かにどう考えても可笑しいわね。」

うらら「細かい事は気にしちゃダメです!!」

舞「気にしちゃうわよ（汗）。」

大介「隊長に抗議を・・・あれ？繋がらない。」

美希「地下だからよ、きつと・・・」

ラブ「そうだよ!! SAFに感謝 感・・・」

その時、突如ラブとシフォンがのびた木に巻き付けられた。

ラブ「きゃあ!?!」

シフォン「キュアアアア!?!」

大介「なっ、なんだ!?!」

すると四方八方から木がのび全員に巻きつき持ち上げられた。

舞「きゃあ!?!何!?!」

せつな「何これ!?!」

すると地面から怪獣が出てきた、ケーキの木といいカレーの木とい
いそれは怪獣が作り出したものだった。

大介「しょ、植物怪獣!？」

舞「小型だけど凄い力!？うう!！」

咲「舞!手!」

しかし両者手を拘束されているので変身できない。

シフォン「キュアアアア!！」

するとシフォンが超能力でラブ、せつな、美希の木をゆるめた。

くるみ「何で3人だけえええ!？」

「チェインジ!プリキュア!！ビートアップ!！」

ピーチ「ピンクのハートは愛ある印!！もぎたてフレッシュ!！キ

ュアピーチ!！」

ベリー「ブルーのハートは希望の印!！摘みたてフレッシュ!！キ

ュアベリー!！」

パッション「真っ赤なハートは幸せの証!！熟れたてフレッシュ!

！キュアパッション!！」

ピーチ「レッツ!！」

「プリキュアー!!」

うらら「名乗ってないで助けてくださいいいいいいい!!?」

ピーチ、ベリー、パッション「トリプル・プリキュア・キイイイ
ツツツク!!!!!!」

怪獣本体に攻撃し木をさらにゆるめ、一同は変身した。

「デュアルスピリチュアルパワー!!」

「プリキュア・メタモルフォーゼ!!」

「スカイローズ・トランスレイト!!」

名乗り省略!!

ローズ「させるか!!青い薔薇は秘密の印!!ミルキイローズ!!」

レモネード「はじけるレモンの香り!!キュアレモネード!!」

ブルーム「輝く金の花!!キュアブルーム!!」

イーグレット「煌めく銀の翼!!キュアイーグレット!!」

そして大介がファイヤースティックを取り出した。

大介「よし!!ファイ・・・」

ブルーム「いやいやいやいやいや!!!!!!!!」

ローズ「ダメダメ！！絶対ダメ！！私達死ぬから！！」

一応室内だからファイヤーマンに登場されたらどうなる事やらプリキュアは必死に大介を止めた。

レモネード「ここは私達が！！！！」

レモネードとローズが迫り来る木を振り払う。

ピーチ「はあ！！」

ベリー「たあ！！」

その隙にピーチとベリーが本体を殴りつける。

パッション「ブルーム！！手伝って！！」

ブルーム「わかった！！」

イーグレット「行くよ！！」

パッションとブルームは手を繋ぎ、イーグレットの踏み台を作りその勢いでイーグレットは大回転をしながら本体にかかとを落とした。

イーグレット「やった！！」

すると本体はイーグレットを木で捕まえてケーキを作り出してイーグレットの顔に塗ったくり始めた。

イーグレット「むふっ!?!やめ・・・んんんん!?!」

ピーチ「ああ!?!?うらやましい!?!」

ブルーム「そこくいつくな!?!」

大介「にしてもお茶目な事するなあ、あの怪物。」

レモネード「そうですね。」

パッション「悪い怪物じゃなさそうですね。」

しかし

イーグレット「ちょっと!?!感心しないで助け・・・んんんん!?!」

イーグレットの顔は生クリームやらチョコクリームやらチーズ、ジャムででろんでろんだった。

やはりまずいとレモネードが木を殴りつけイーグレットを助ける。

イーグレット「もう・・・甘い物・・・嫌・・・」

チーン

ブルーム「イーグレット!?!」

ローズ「ちょっと、なんも感動しないわよ?」

するとレモネードがいつの間にか捕まっついて、顔にカレーを塗っ

たくられていた。

ベリー「なんかやばいよ!？」

ブルーム「おりゃああああ!！」

ブルームは何とかレモネードを助け出した。

ブルーム「レモネード・・・笑顔で気絶だよ？」

くるみ「そんなにカレー好きなの？」

すると声が響く、なんと怪獣がしゃべったのだ。

怪獣「ほっほっほっ、幸せそうな顔じゃなあ。」

ローズ「しゃべった!？」

イーグレット「幸せじゃないわよ!!--ケーキ塗ったくって!!--べとべとじゃない!!--」

怪獣「おや?そうか・・・甘い物は苦手かい？」

イーグレット「いやそうじゃなくて!？」

すると大介が怪獣に話しかけた。

大介「怪獣よ!!--幸せが嬉しいのか!!--」

怪獣「さよう、ワシは人間達の夢から生まれた怪獣じゃ。」

ピーチ「夢から?」

パッション「どういう事?」

怪獣「人間の夢には知られざる力があってな、その力がここに集まり出来たのがワシじゃ、お菓子やコーヒーを求めている声が聞こえてな、ここに来てもらった。」

レモネード「へえ。」

ベリー「いつの間にか起きたの!?!」

ブルーム「やっぱり悪い怪獣じゃないのね。」

しかしイーグレットは

イーグレット「それとこれとは話は別!!何でケーキ塗ったくつたのよ!?!」

怪獣「ここに人間が住みついたのは本当に久しぶりで嬉しかったんじゃあ、少しやりすぎてしまったようじゃがな。」

ベリー「イーグレット、もう許してあげなさい?」

ローズ「反省してるんだから。」

イーグレット「ぶ〜。」

パッション「ふてくされないの。」

大介「それはそうと名前なんて言うんだ？怪獣じゃあなんかな。」

怪獣「名前・・・良ければ付けてくれんか？」

ブルーム「私達が!？」

レモネード「そうですねえ、木は英語でウッドだから・・・」

パッション「ウツチャンはどう？」

怪獣「気に入った、わしは今日からウツチャンじゃ。」

ピーチ「じゃあ改めてよろしくね、ウツチャン!！」

ウツチャン「ほっほっほっ、お菓子が欲しい時はいつでもおいで。」

一同「わ〜い!」

ウツチャンが仲間になった!!

つづく

第18話 恐怖（前書き）

怖い話は書くのが苦手です。

第18話 恐怖

PAT本部・・・

ナオキ「みんな帰ってこないなあ。」

そこに

祈里「ねえ、みんな写真撮らない？」

タルト「パインはんだデジカメ持つてるさかい、記念に撮ろうやないか。」

一同は祈里のデジカメで集合写真を撮った。

祈里「確認してみよう。」

祈里はデジカメの画像を確認した。

ナッツ「どうだったナツ？」

祈里「ナッツちゃんにタルトちゃん、シプレちゃん、コフレちゃんにポプリちゃん、ルルンちゃん、ポルンちゃん、私達でしっかり16人撮れてるわ。」

こまち「良かったわ。」

しかしかれんが

かれん「16人？可笑しくない？ナオキさんを入れて私達は8人、妖精達は7匹・・・数え間違えてるわ。」

祈里「えっ！？え〜と1、2、3・・・11、12、13・・・16、あれ？」

つぼみ「見せてください。」

いつき「僕も。」

つぼみといつきが画像を確認する。

つぼみ「15・・・16人で合ってますよかれんさん。」

かれん「うそ？」

するといつきが

いつき「ちよつと待って・・・えりかとこまちの間にいる人・・・誰！？」

えりか「ん？・・・誰この人！？」

こまち「可笑しいわよ、私とえりかさんは背中を壁につけながら写真を撮ったのよ！？」

ナオキ「祈里！！画像消して！！」

祈里「あっ、はい！-！」

祈里「大丈夫？えりかちゃん。」

えりか「祈里！！今日あなたの部屋で寝かせて！！」

祈里「うっ、うん。」

かれん「大丈夫かしら？」

・・・

その夜・・・

こまち「えくと、犯人は・・・あら？もうこんな時間？」

こまちは推理小説にのめり込み時間を忘れていた、同じ部屋のかれんは既に眠っていた。

こまち「寝ないと。」

こまちが布団に入ろうとした時、壁に穴があいていた。

こまち「あら？穴なんてあったかしら？」

こまちはなんとなく穴を覗いてみた、赤い風景が広がっていた、20分ほど覗いていたが変化はない。

こまち「何かしら・・・」

ふとこまちはえりかの言葉を思い出した。

えりか（赤い目の女が私を見てたのお！！）

こまち「（赤い目、赤い風景、見てる・・・！？）きゃあああああ
ああああ！？」

こまちは絶叫した、赤い風景が広がっているという事は赤い目をした女が自分を見つめているという事だからだ、眠っていたかれんが慌てて目を覚ました。

かれん「こまち！？どうしたの！？」

こまち「ああ・・・うう・・・」

こまちは恐怖にかられた。

翌朝・・・

いつき「えりかに続いてこまちまで・・・」

ナオキ「赤い目の女だっけか？」

かれん「調べたいけど調べようがないわよね。」

そこに夏が

夏「祈里、画像は消したんだな？」

祈里「あつ、うん・・・えっ！？」

祈里はデジカメのデータを見て青ざめた。

つぼみ「どうしたんですか!？」

祈里「画像が・・・復元されてる。」

一同「はあ!？」

確かにその画像は復元されていた、それどころかえりかとかまちの後ろにいる女が最初は立っている だけだったが今は2人の肩に手をかけている。

祈里「最初は後ろに立ってただけだったのに!？」

タルト「あかん!! マリンはんとミントはんがまずいで!!」

かれん「でも助ける方法が!!」

するとナオキが

ナオキ「その女に会ってみよう。」

一同「えっ!？」

なんとナオキはその女に近づこうと言っただ。

ひかり「相手は霊ですよ!？」

ナオキ「ならとっちめてやる!」

その夜ナオキはえりかの部屋で一人でした。

ひかり「きゃあ!?!」

かれん「どういう事?」

ナオキ「くそ!?!何なんだ!?!」

.....

ナオキ「こまち、えりか、今日は俺から離れるな。」

こまち「・・・はい。」

えりか「でも・・・どうするの?」

するとナオキが

ナオキ「聞こえるか!?!何故この2人を狙う!?!」

こまち「ナオキさん、まさか?」

えりか「・・・なんか感じる。」

ナオキ「2人共、俺の手を握れ。」

こまちとえりかはナオキの腕を握る。

ナオキ「寂しいのか!?!それとも苦しいのか!?!どちらにせよ俺にはお前の気持ちは分かる!?!」

するとえりかとかまちの様子が変わる。

えりか？「お前に何故わかる？」

こまち？「私達の苦しみが。」

ナオキ「取り憑いたか、まあ話やすいな、何故2人を狙う？」

えりか？「私はいつも自分の事しか考えない奴が大嫌いだ、そんな奴を地獄に落としたいからだ。」

こまち？「いつも信じられる友達がいる奴が大嫌いだ、そんな奴を地獄に落としたいからだ。」

ナオキ「その後はどうするんだ？この2人を地獄に落としてどうするんだ、世界中のそんな奴らを地獄に落とすまで続ける気か？」

こまち？、えりか？「……………」

ナオキ「俺も兄を殺した奴を許す事はできない、だが復讐にのまればならダメだとわかった……………相手を自分の都合で苦しめたらダメなんだ、もう2人から離れる。」

するとえりかとこまちは我にかえった。

えりか「あれ？私達……………」

こまち「何をしていたの……………なんだか体も楽し。」

ナオキ「もう大丈夫だ、今日からゆっくり休め。」

えりか、こまち「……………はい。」

その日から祈里のデジカメの画像はすっかり15人が幸せそうに写った物になった。

つづく

第18話 恐怖（後書き）

短連載小説なのでそろそろ最終段階です。

第19話 根源

ブラックとホワイトはミラーマンと共に怪獣と戦っていた。

ブラック「はあー!!」

ホワイト「たあー!!」

ミラーマン（ミラーナイフ!!）

3人は怪獣を撃破した、すると暗黒の塊が現れた。

ミラーマン（何だ!?!）

ホワイト「まさか・・・」

ブラック「ギガント!?!」

そう、あれは全ての根源・ギガント。

ギガント「計画は最終段階に入った・・・この融合した世界を消滅させる、ついでに次に消滅させる世界のプリキユアもな。」

ブラックは拳を握りしめる。

ブラック「ふざけないで!!」

ホワイト「あなたの好きにはさせない!!」

ミラーマン（今すぐにでも倒す！！）

ギガントは不気味に笑う。

ギガント「ははははは、無駄だ・・・まあ、せいぜい頑張るんだな。」

ギガントは姿を消した、一度メンバーを集めて話をしたほうが良いとメンバーはSGM本部に集まった。

・・・

ナオキ「ギガント・・・それが大ボスなんだな。」

シロップ「そういえば大介もそんな事言ってたロプ。」

のぞみ「ギガント・・・許せない！！！」

ココ「それはみんな同じココ。」

大介「しかし計画の最終段階って何だ？」

京太郎「わからない、でもとんでもない事に決まってる。」

ひかり「まずはそれを阻止しないといけませんね。」

その時

御手洗「みんな大変だ！！！」

満「どうしたんですか？」

御手洗「宇宙から何百の怪獣が迫っているんだ!!」

一同「!？」

一同は外に出た、既に地球に到達しているのもいる。

京太郎「ミラー・・・スパアアク！」

大介「ファイヤアアア!!」

ナオキはセスナに乗り込む。

ナオキ「ジャン・ファイト!!」

「デュアル・オーロラウェーブ!!」

「ルミナス!!シャイニングストリーム!!」

「デュアル・スピリチュアルパワー!!」

「プリキュア・メタモルフォーゼ!!」

「スカイローズ・トランスレイト!!」

「チェインジ・プリキュア!!ビートアップ!!」

「プリキュア・オープンマイハート!!」

「光の使者!!!キュアブラック!!!」

「光の使者!!!キュアホワイト!!!」

「輝く命!!!シャイニールミナス!!!」

「輝く金の花!!!キュアブルーム!!!」

「煌めく銀の翼!!!キュアイーグレット!!!」

「大いなる希望の力!!!キュアドリーム!!!」

「情熱の赤い炎!!!キュアルージュ!!!」

「はじけるレモンの香り!!!キュアレモネード!!!」

「安らぎの緑の大地!!!キュアミント!!!」

「知性の青き泉!!!キュアアクア!!!」

「青い薔薇は秘密の印!!!ミルキイローズ!!!」

「ピンクのハートは愛ある印!!!もぎたてフレッシュ!!!キュアピ
ーチ!!!」

「ブルーのハートは希望の印!!!摘みたてフレッシュ!!!キュアベ
リー!!!」

「イエローハートは祈りの印!!!とれたてフレッシュ!!!キュアパ
イン!!!」

「真つ赤なハートは幸せの証！！熟れたてフレッシュ！！キュアパ
ツション！！」

「大地に咲く一輪の花！！キュアブロッサム！！」

「海風に揺れる一輪の花！！キュアマリン！！」

「陽の光浴びる一輪の花！！キュアサンシャイン！！」

「月光に冴える一輪の花！！キュアムーンライト！！」

それぞれ怪獣を倒していくが倒しても倒しても宇宙から新たな怪獣
が降り立ちきりがなく体力が消耗するだけだった。

ローズ「きりがない！！」

ファイヤーマン（くそ！！時間制限もあるのに！！）

全員が体力が無くなりかけたその時、黒い雲が全員を包み込んだ。

ドリーム「なっ、何！？」

「うわああああああああああああ！！！！！！」

.....

目を覚ますとそこは異様な光景だった、空は紫色に渦巻き、大地が
広がっている光景、どうみても異世界だった。

プリキュアがギガントに向かって攻撃を仕掛ける。

イーグレット「はあああああー!!」

ピーチ「たあああああー!!」

しかし鎧をまとったギガントにはビクともしなかった。

ブラック「何よこの鎧!?!」

レモネード「固すぎます!?!」

ギガント「攻撃のつもりか?」

ギガントは腕を振るいプリキュア達をなぎはらった。

プリキュア「きゃあああああー!?!」

ミラーマン（ミラーナイフ!?!）

ナオキ「ハンティングフラッシュャー!!」

ファイヤーマン（ファイヤーフラッシュュ!!）

3大巨人も必殺技を繰り出すが鎧で全て弾かれてしまった。
ギガントは目から光線を放ち3大巨人を吹き飛ばした。

（うわあああああ!?!）

ブラック「くっ、ルミナス!?!ホワイト!?!」

ホワイト「わかったわ!!」

ルミナス「行きましょう!!」

3人は構える。

ブラック「漲る勇気!!」

ホワイト「溢れる希望!!」

ルミナス「光輝く絆と共に!!」

「エキストリーム・ルミナリオ!!」

黄金色の巨大な光線がギガントに向けて放たれた、しかし

ギガント「ほう、なかなかの技だな。」

ギガントは一本の指から細い紫色の光線を出した、そしてエキストリーム・ルミナリオが一瞬で消されてしまった。それどころかその紫色の光線はまだ放たれていた。

ルミナス「!」

ホワイト「そんな!？」

ブラック「危ない!？」

ブラックが2人をかばい光線を受けた、そしてブラックはたちまち

姿を消した。

ベリー「ブラック!?」

ブロッサム「消え・・・た?」

するとギガントが

ギガント「消えたのではない、消滅したのだ、奴はもう姿を現す事はない。」

ミラーマン(な・・・に?)

ホワイト「よくも・・・よくも!!」

ホワイトはギガントに向かっていった。

ルミナス「ダメですホワイト!!」

ギガントはホワイトを掴み上げて片方の手の指を向ける。

ギガント「消えろ。」

ホワイト「あっ・・・」

ホワイトは紫色の光線を受け一瞬で姿を消した。

ナオキ「ふざけんなああああ!!」

ジャンボーグAはギガントに突っ込むが簡単に叩き落とされた。

ギガント「貴様も邪魔だ。」

ギガントはまた光線を放った。

ピーチ「ダメ!!」

イーグレット「させない!!」

しかしピーチとイーグレットがジャンボーグAをかばい姿を消した。

パイン「ピーチ!!」

ブルーム「イーグレット!!」

ギガント「一人ずつは面倒だ。」

ギガントはプリキュアに向けて両手の指を向けて多数の光線をマシンガンのごとく放った。

ミラーマン（やめろ!!）

ファイヤーマン（まずい!!）

ナオキ「くそあ!!」

3大巨人がギガントに向けて攻撃を放つがギガントにはビクともせず光線を打ち続ける。

ドリーム「はあはあ、あつ!!」

パッション「ドリーム!! あっ!?!」

ルミナス「このままじゃみんな消されて、あっ!?!」

ムーンライト「せめて私達は残らないと、あっ!?!」

ついにはプリキュア全員が消されてしまった。

ミラーマン(何て事を!?!)

ファイヤーマン(許さん!?!)

ナオキ「覚悟しろ!?!」

ギガント「ふん、すぐに貴様らも消してやる。」

3 大人はギガントの攻撃をかわしながら攻撃をくわえていく、しかし全く効いていない、はたしてどうなるのか。

つづく

第20話 奇跡

プリキュアは消された、しかしある次元の中にその魂が残っていた、その次元は何もない、明るさも暗さも物も風景も、何もない場所・
・いや場所という概念すら無いのかもしれない。

ブラック「ここ・・・どこ？」

満「何も・・・ない。」

ルージュ「なんだか体が・・・浮いてるみたいで楽だね。」

ベリー「ずっとここにいれば・・・良いかもね。」

マリン「誰も悲しまない・・・誰も傷つかない。」

しかし

ドリーム「ダメだよ。」

他のメンバー「？」

ドリーム「確かにここにいれば楽かもしれない、でも必ずどこかで悲しむ人がいる！！家族や友達が！！・・・もしかしたらあの女の子みたいな子も。」

ブラック「・・・確かにね。」

ブルーム「ここで諦めたら終わりだね。」

ピーチ「誰も悲しませたくない。」

ブロッサム「私目が覚めました!!」

薫「でもギガントは強敵よ？今私達がどこにいるかもわかんないわ。」

サンシャイン「でも何とかしないとイケない!!」

その時、何も無いところから光がもれだし様々な映像が流れた。

ルミナス「これは!？」

パイン「私達？」

ムーンライト「いや、正確には別世界・・・パラレルワールドの私達。」

ドリーム「もう1人の・・・私達。」

それは様々な戦士と協力し巨大な悪と戦う別世界のプリキュアの映像だった。

仮面をつけた戦士達、ミラーマン達とは違う巨人達、複数で悪と戦う戦士達、キラーと名乗る戦士、キュアセイバーと名乗る見たことのないプリキュア、昆虫のような鋼鉄を身にまとった戦士など戦う映像。

パッション「みんな・・・私達と同じ？」

アキラ「あんな怪物と諦めず戦うなんて・・・」

「仲間というのは、共に悲しみあい、憎しみあったりする、だがそうだったとしても共に励まし合い、許し合う心を持つ者どうしを仲間というんだ!!」

「どんな絶望の中でも、人々の心から光が消え去る事はない!!」

「さあ、裁きを受けるがいい!!」

「全てを希望へ導く救世の光!!キュアセイバー!!」

「我ら!!スーパー戦隊!!」

「超重甲!!!!」

別世界のプリキュア「あなたの思い通りにはさせない!!」

サンシャイン「どんな時でも諦めない心・・・忘れてたよ。」

ローズ「最後まで諦めなければ、必ず奇跡は起こる。」

ピーチ「それはどの世界でも・・・」

プリキュア「同じ!!」

プリキュアが決して諦めず最後まで戦い続ける心を思い出した時、奇跡の光がプリキュアを包み込んだ。

.....

ギガント「良い加減諦める、貴様らに勝ち目はない。」

ミラーマン、ファイヤーマン、ジャンボーグAは苦戦を強いられていた、しかし

ミラーマン（諦めるか!!）

ファイヤーマン（俺達にどれだけの人の思いが託されていると思う!!）

ナオキ「たとえどんなに傷ついてもめえだけは絶対に許さねえ!!」

ギガント「ふん、消え去れ!!」

ギガントが攻撃をしようとしたその時、膨大な光が目の前に現れた。

ギガント「何!?!」

それは消えたはずのプリキュアだった、そして

ギガント「なっ!!その姿は!?!」

ブラック「あんたを倒すため!!」

ブルーム「奇跡の光が力を与えてくれた!!」

「思いを咲かせる奇跡の光!!シャイニングドリーム!!」

「ホワイトハートはみんなの心！！羽ばたけフレッシュ！！キュアエンジェル！！」

「ハートキャッチプリキュア！！スーパーシルエット！！」

そう、プリキュアは奇跡の光により最強の姿に変わったのだ。

ギガント「諦めろ！！貴様らに未来はない！！」

ギガントがまた光線を放った、しかしプリキュアの生み出した光の盾により防がれた。

ギガント「ばっ、馬鹿な！？」

ミラーマン（強い・・・）

すると

ギガント「ふざけるな！！何故あんな世界を守ろうとする！？滅びかけた世界など宇宙に必要ない！！」

ファイヤーマンは拳を握りしめる。

ファイヤーマン（ふざけるな！！確かに世界は人々によって滅びに近づいてるけどなあ！！）

ナオキ「その滅びから世界を守る事が出来るのも人間だ！！」

ミラーマン（貴様のような自分の私利私欲で世界を滅ぼそうとするなら！！）

(俺達が止めてみせる!!)

その時、プリキュアから膨大な光が放たれた。

薫「なっ、何!?!」

シャイニングドリーム「光が、ミラーマン達に・・・」

ミラーマン、ファイヤーマン、ジャンボーグAは光に包まれ姿を変えた。

ギガント「まさか貴様ら!?!」

????(そのまさかだ!!)

????(俺達は全身全霊をかけて!!)

????「てめえを倒す!!」

キュアエンジェル【パイン】「姿が・・・」

ウィンディイーグレット「変わった。」

「鏡の騎士!!ミラーナイト!!」

「炎の戦士!!グレンファイヤー!!」

「鋼鉄の武人!!ジャンボッド!!」

3 大巨人は奇跡の光により、新たな巨人へと姿を変えたのだ。

つづく

第20話 奇跡（後書き）

次回、最終回！！

腕を振り下ろし通常の倍の数のナイフを投げつける。

ギガント「こんなものが効くともー!!」

しかしそのナイフは確実に直撃しギガントの鎧に傷をつけた。

ギガント「なっ!?!?馬鹿な!?!」

すかさずグレンファイヤーが武器・ファイヤースティックを構える。

グレンファイヤー（くらえええええええ!!）

ファイヤースティックからは膨大な炎が放たれた。

そして鎧の傷を深くした。

ギガント「貴様らあああ!?!」

ギガントは黒いエネルギー弾を放つがジャンボッドが盾になる、ジャンボッドにはビクともしなかった。

ナオキ「うおおおおお!!」

ジャンボッドはその鋼鉄の拳でギガントを殴りつけついに鎧に大きなヒビをいれた。

ギガント「うっ!?!?おのれ!?!」

ギガントはジャンボッドを殴りつけて吹き飛ばした。

ナオキ「うおっ!?!」

ミラーナイトがミラーナイフを放つがギガントはマントを盾にし防ぎグレンファイヤーの炎さえも防ぎ、2人を吹き飛ばした。

ミラーナイト（うわっ!?!）

グレンファイヤー（ぐあっ!?!）

ギガント「ハハハハハ!!これで最後・・・!?!」

しかしギガントはブライティブルームとキュアエンジェル【ピーチ】の攻撃を受けた。

ブライティブルーム「はああ!?!」

キュアエンジェル【ピーチ】「やああああ!?!」

ギガント「がはっ!?!」

続けざまにシャイニングドリームとブロッサムスーパーシルエットが追い討ちをかける。

ブロッサムスーパーシルエット「やああああ!?!」

シャイニングドリーム「だああああ!?!」

ギガント「ぎゃああああ!?!」

ギガントは吹き飛ばされた、そして向き直る。

シャイニングドリーム「ダークドリーム!!」

それはかつてドリームを守るために命を失った闇の戦士・ダークドリームだった。

シャイニングドリーム「どうしてここに?」

ダークドリーム「さあ?でもあまり長くはいられないわ。」

ギガント「おのれ・・・!?力が・・・」

ダークドリーム「あらごめんなさい、あんたの闇の力・・・ちょっともらったから。」

するとダークドリームが光りだした。

ダークドリーム「そろそろ時間ね。」

シャイニングドリーム「そんな、せつかく会えたのに・・・」

ダークドリーム「大丈夫、私とあなたはいつでも一緒でしょ?」

シャイニングドリーム「・・・うん。」

ダークドリーム「ちょっとそこの大きいの3人組!この子悲しませたら承知しないわよ?」

ミラーナイト(わかってる!!!)

グレンファイヤー(必ずみんなを守る。)

ナオキ「安心しろ。」

ダークドリーム「頼んだわよ。」

そしてダークドリームは光と共に消えた。

ギガント「我が力を!?!」

ミラーナイト（覚悟しろ!?!）

ルミナス【スーパープリキュア】「いきましょう!?!」

「これで最後だ!?!」

ミラーナイト（シルバークロス!?!）

グレンファイヤー（ファイヤーフラッシュ!?!）

ナオキ「ハンティングフラッシュャー!?!」

3 巨人の技が融合に魔法陣が出現した。

プリキュア「未来へ導け!?! 奇跡の光!?!」

「グレン・レインボーフラッシュ!?! ホーリーミラージュ!?!」

魔法陣からは光り輝く鏡の剣が現れ虹色の炎をだしながらギガントに向かって放たれた。

なぎさ「お世話になりましたね。」

ほのか「色々あったし。」

京太郎「君達に出会えて良かったよ。」

満「寂しいなあ。」

薫「仕方ないわよ。」

ゆり「あら？のぞみ？」

りん「あらら、泣いてる。」

のぞみ「うえ〜ん！！寂しいいよあ〜。」

ココ「ココもココオオ！！！」

ムーブ「泣いちゃダメムプ！！！」

フープ「そうププ。」

メップル「なぎさ！！時間メポ！！！」

ミップル「京太郎、ありがとうミポ。」

京太郎「元気で、なあと・・・また会えるさ。」

のぞみ「うん！！・・・私達ずっと友達だよ！！！」

.....

ウツチャン「そうか、もう行ってしまっただのか。」

大介「運命か・・・厳しいな。」

ラブ「また会えるって!!！」

美希「そうよ、信じてればね。」

せつな「泣かない、落ち込まない!!！」

咲「結局ウツチャンとはあまりしゃべりなかつたなあ。」

舞「ケーキの味はしっかり覚えておくね。」

うらら「カレーもです!!！」

くるみ「まあ楽しかったわ。」

フラッピ「みんな!!！時間ラピ!!！」

チヨッピ「寂しいけど仕方ないチヨピ。」

シロップ「世界を渡れるようシロップも頑張るロプ!!！」

シフォン「キュア〜」

.....

ナオキ「結局みんな戻らなかったな。」

かれん「一度お会いしたかったけど仕方ないわね。」

こまち「また来れるわよ。」

祈里「私信じてる!!」

ひかり「早いですねお別れの時が来るのは。」

つぼみ「えりか。」

えりか「よしよし、泣かないの。」

いつき「感謝します。」

ナオキ「俺の方こそありがとう。」

シプレ「信じていれば願いは叶うですつ。」

コフレ「キュアフラワーが言ってたですつ。」

ポプリ「そろそろ時間でしゅう。」

タルト「もうそんな時間かいな、はあ……早いもんやなあ。」

ルルン「寂しいルル。」

ポルン「仕方ないポポ。」

ナッツ「さあ、みんなの所に行くナツ。」

.....

のぞみ「じゃあ行こうか。」

その時

「みんな!!」

プリキュアメンバーが振り向く、京太郎、大介、ナオキがいた。

京太郎、大介、ナオキ「また会おう。」

プリキュアメンバー「!!.....はい!!」

そして3つの世界は分離されプリキュアメンバーは元の世界に戻った。

.....

数週間後.....

のぞみ「京太郎さん達元気かな？」

ラブ「大丈夫だよ!!」

なぎさ「うん、で何で私達集まったの？」

咲「わからない、でもなんかに導かれた感じだよね？」

つぼみ「何でしょうね？」

その後、のぞみ達が持っていた鏡が光り出したり、地底から物音が聞こえたり、セスナが飛んでいたとかそそうでないとか……。

完

最終話 ずっと友達（後書き）

ターザン「終わった〜!!」

のぞみ「これで超クロスオーバー物語復活だね。」

ターザン「うん!!後は少し要望を整理して執筆するだけだよ!!」

京太郎「ねえ、また新しい小説書かないの？」

ターザン「少し間があいたら執筆するよ。」

のぞみ「というわけでみんなバイバイ!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5023o/>

プリキュアオールスターズ×3大T巨人

2011年1月4日21時43分発行